源氏物語講義

若紫

此巻に於て、源の宮上をひそかに迎へとり隠ひしと云ふ兵部卿の親王は、乳母おかくしたてまつりて、さりて清和天皇とぞ申すとめのたまはせ給ふ。今の世さまざまにてはいと云ふのきやうもれどかうやうのことは当時の風なるべし。評釈は此巻は、二大段八小段に区別すべし。一小段に於て源瘧病しる

若紫の巻　凡一大段八小段五十二節

此巻は源十八歳の三月より。翌年の三月までのことを叙せり。巻の名は紫の上の幼なきを。なぞらへたる歟。湖月抄の説のごとく。源の歌に紫のゆかりとなつかしいつくしまの人とあるを。とりて名づけしなるべし。新釈に。若紫は幼き根を用ゐる物なるを。紫の上を。伊勢物語に。春日野の若紫とよめるを。なぞらへたるなり。衣。とよめるは女を。なぞらへて若紫といふべきなり。ぱつのまとりこうへて。ぱつといへるとみゆ。紫は巻ばは巻紙を。何心なく用ゐて。名づけしのごとなるべし。とつえ。評釈に。紫は名のことは新釈のごとく。源瘧病のことは。源をもとめ出でたるとあり。○この巻は。紫の上を。すでの一段に。されば。まづ紫の上を首とし。次に源の瘧病のこと。小山の聖加持のこと。後壺に悩みて内裏より退出のこと。并に懐姙のことを叙して。源の後壺に密通のことを。始めてあらはしたり。さて小山の聖のことを源の帝へ奏しのべるは。聖のことを述べ

恵川真頼大人校定
鈴木治茂大人講義
小串隆筆記
杉河氏義板

恵川真頼大人校定

鈴木治茂大人講義

小串俊躬記

杉河氏義板

若紫

此巻に於て源の氏上をひそかに迎へとり給ひ[illegible]紫の上の幼女おかくしたてまつりて、さりて[illegible]

とあるのみなれば今の世にさまざまにていはいといぶかしきやうなれど、かうやうのこと古の風なるにや、注釈に此巻ハこの前後の夕貌浮舟などのごとく続てらして疑ふべきのうたがひといへり、

段落

此巻ハ、一大段八小段に區別すべし、一小段に於てハ源瘧病しる

凡一大段八小段五十二節

若紫の巻

此巻ハ源十八歳の三月より。翌年の三月までのことを叙せり。巻の名ハ。若紫とは。きたる何ハ。[illegible]歌に[illegible]よりて[illegible]たる[illegible]ものゝ[illegible]ゆ。紫色ハ[illegible]づけ[illegible]新釈のぬくもるべき[illegible]源おもへそめ[illegible]すでの一段[illegible]瘧病[illegible]り退出[illegible]壷に密通[illegible]聖のことを源おもて帝へ奏[illegible]ハ聖のことを[illegible]

ひて、小山の聖のもとへ、
思びてものゝ一のふしを
叙し、二小段は、小柴垣
の透見より始めて竿上を
又のふしと、三小段は、大
殿の公達は迎より来つ
れば、内京一のふと、四
小段は、源姿上より逢の
ふしと、小山へ侍遣し
のふしと、五小段は、茶壺
は悩まして三条中宮は
滞在のこと、六小段は、尼
君出京故按察郎より滞
留原訪ひのふと、七小
段は、尼君うせのひて
竿上女房どもの細き
状べ、八小段は、兵部々
のもと竿の上を訪のふと、
源ひそうより竿上を二
条院へ迎とりのふと

る文法なり○此巻は夕白の巻は此ぐきものこゝ
くべきを。そのとゝ次の末摘花の巻より受て源のこ
らはやこのことりかき出したるは、ぬるく人業ゐれ心
ちもべし。巻又例の文法。さて此巻より。姿上と茶壺
のことあるは、夕白の巻より。京師とは条は息不を加へた
ることおれ文法。この巻ましては。京師はあくまでかれ
なきよ。は自息不の方へは。源のこんのまくまぬよはけて。
まもく夕白のうこより思ひのまのふさをうせたり。
は巻は源ぶ多ゐ大殿へおくまませども。姿上は思ん
のうちとけの心ぶ。京師かける姿のやうなれど。いと思
ひの外なる。茶壺のこゝはりこゝりみそのどな
れば。こんの中くまる。さこのこゝよいとをこゝる
くはあれど。は上のこゝいまくこんをよせ給ふさま
こそ。ゆめめる。作者は巻づひのさは。源さしてこゝ
源瘧病を給ふこと
こゝはやこゝより。ひのひて。よろぶまこゝるひ。
るどをこゝせのこゝど。こゝる験こゝてあまこゝ多びおこと起
りのひけれど。是迄冒れこゝり。あこゝ人きこゝ山よこん。鞍馬寺こゝべ
なこゝ

を叙して、巻ごとに文を
除べるなり。

眼目

眼目は、一小段の第三節
より、ぐちいとまくまあ
るは、二小段の第七節
より、げよんこゝよりあ
まて、切れじ。を省くこ
木子をこゝ多こゝまこ
へり。三小段の第六節
より、まくまあるこゝの
こゝを、同第七節より、あ
のこゝまこゝどゆ多ある
流のまくこゝ。とあるは
まくまくとゆ多こゝをいひ
こゝへたるこゝ。又二小段の
第七節より竿の上を
人のまくこゝをまくへお
ゆまくこゝこゝ六
小段の第三節より、と

でらといつふよ。賢キ
こゝ世よおこゝて。行者こゝ人侍る。去こゝれ
おてとぐ出るこゝ多ぐひあまこゝ侍りきこゝこゝのし
つる時いこゝて侍るを。早速こゝそんこゝさせ給こゝめ。
こゝどゆゆれば。上人を召こゝ。こゝまつこゝこゝ。老屈おひこゝま
りて。室むろのこゝ外こゝもまこゝでを。こゝこゝれば。原河いこゝぐこゝ
ぜん。去のひてこゝものぜんこゝのこゝひて。ぼこゝ山つま
じき四五人だこゝり去て。まぐ味こゝ。おひこゝ。やこゝふ
こゝいこゝ多こゝりけり。三月やよひのつごもりなれば。京まこゝの
花ざかりをこゝられこゝよこゝり。山のさこゝ櫻花こゝこゝまぐこゝ

ようをゝ〜へてんとおぼえ八小段の第九節よりようをゝ〜（中略）とある八皆眼目にて、聖意をのべたり、

眼点

此巻の発端より引ハ「やゝ云〜」とある八、次の末摘花の巻より引ハ「やゝ云〜」とあるより聖意八、又二小段の第五節よりこの巻きものどもハかくるありきをのゝ〜てよくさるまじきことをもうくるゝ〜とあるハ遠く西殿の物語より聖意を出るゝ、一小段の第四節より論よりとくゝ

ありてゆりてあそするまゝに、殿のたゝずまひをもうらゝゆれど、かくるゝかりさはるもなくひ孤たゝず。おもきはたゝ狭きまでめづらしうおぼされけり。

一小段の第一節に三月のつごもりばかりよ。源氏ハ北山へとて。家を立出るの状に。是ハ源の上を又ゝ加持をしてゆ。細流より癘ハまそびらしてふ。あ〜ゝおちうぬるゆゝ〇北山の状ハ漸く深く山に入るおとゝ〇いりもておそすゝめるゝ伏案に〇おとゝひ人ハ行者ハ北山上人に〇世よおとゝりて世よ癘病流行して〇やゝてとぐむるゝぐひ上人ゝ加持をして。ゆ。癘ハ病を治すつる類に〇おく〜ゝ附ハ細流より癘ハまそびらしてふ。あ〜ゝおちうぬるゆゝ〇おのびてものせん源潛行しのゝんとゝ〇聞とゝもよりもつまき四五人ゝ〇やゝふうゝいるおり。性光良清を始として四五人ゝ〇やゝふうゝいるおり。北山の状ハ漸く深く山に入るおとゝ〇いりもておそすゝるゝに源山よりもつけ入りるゝ。色より北山の景色をいゝ〇殿のたゝずまひ殿のたゝずまひ〇おもきはたゝ狭きまでゝ訓のゝびとゝ〇北山の寺ゝ

ありけさはるもいとあはれなりゝ。ゝぬゝとあくゝふのきいゝじうもさゝせのゝん。ゝるどゝるゝ八須广よりて、更をかきのゝ伏案まして、孫よ繪合の老よりはゝゝろびゆゝり、又同第五節より、良清の明石の入道の物語より通ひのゝ伏案にさて此外よりもあれどゝゝ八をゝ不の浦よりゝゝ、

一小ノ第二節

いゝゝ源のゝ家の」岩れ立めぐれる地勢を云ゝ〇「日めゝ」ゆゝ上よりゝ〇いゝ

ゝれどゝゝゝ〇いゝ

ゝも此世のゝゝゝ」上人年老たれば現世の祈禱よりゝ後世のつ

いゝたのゝゝのゝ。聖ゝ北山上人ひじりをいりゝゝりけるのぼり源ゝ

ゝのひて。強と源ゝ君ゝ此世のゝゝゝびゝゝいとゝゝゝ病者の状ゝゝゝゝれゝ

ゝれど。ゝゝゝ何とゝゝ源ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ怨多ゝゝゝゝゝゝゝ一日ゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

とめを心がくるもとゝ、

一小ノ弟三節

引このこと僧坊に比叡山四十九院ありしとゝ。○つぐらをり九折又白氏文集に蜀陝とかけり、鞍ゐるの七まがりと云ふなるべしと旧注にあり○なまめかし僧都に孟に覺忍僧都号北山僧都見栄花物語とあり、されど此あるこゝ宮ゝ上の大伯父なり、母の伯父なるゝ人まして北山の尼君の兄ゝとゝあるべし○あやしうもあまりもやつけまされに伺供の知るゝ人なれば供などを略しゝるを源

さしあがりぬとあるハ上の弟一節よりすぐ蜻よりおろすと刻の移れるさまなり。時尼の伺供

ゝあるそ尾ゝ符おるどつくり加持するどまるあひだなり。

ゝ立出つゝゝとゝゝゝのゝ人ぶ。尼の伺供たのきゝ

不ゝてこゝこの僧坊どもあゝはよこゝおろさるゝ。

伺供

けつぐらをりの志もおれどこゝたるれど。

キレイニ

うゝゝゝうゝ志ゝゝてきよげなるやらうなど

屋廊

たゝけてこぐちいとゝ◎由◎緒◎あるハなる人のもむよ

ゝとゝひのゝへば。閑とゝなる人これゝんなるべし

僧都の。細云三年禁足の由ホ。ゝゝゝゝゝとゝせこゝり伺る坊よゝべるなる。

伺供

ゝろゝ川のうゝき人をむなるおよこゝそあるれ。

あやしうもあまりやつけるゝれきゝゝこゝそ

恥のふさまゝ○あのたゝまつり開伽ゝ仏ゝをるゝゝ○伺都ハよりもや女を置のふとハあるまゝゝゝ○くちゝいふさゝてハいのるゝ人なるちんと伺供のゝくゝロゝよいふゝ○ありてのぞくゝもあり人ゝの中よ山より下りて透見をるゝ○をのゝげなる女ごほどのよさゝうな女房ゝ、

一小ノ弟四節

天ハおこゝうひ病をいのりのふゝ細よ看経をゝどゝのふゝとゝなり○日たくるまゝゝよ日の傾きゆくまゝよ

ゝれゝどのゝるふ。尼男住居の状ゝ

ゝきゝゝげるゝゝゝゝゝ

後山へ山のすきまあるべし

の山よりたち出て京のうへこのしのぶのうへ
よ霞をうちうして四方の梢をこそのとなるべし
ありとうれるほどに遠方(ヲチカタ)よりいとよくかれたるおれ。
かくるおよすをむんぬよりおのひのうちをとふあらじあ
しとのうへまんぶこれはいとあさきに侍るべ人のくるな
どよ侍るべうこの山のみ捨ぢ絶ばらんぎをせて侍べ。
いのよ思ふいといとうまさらせ給へんふじの山。
なるぶのうへけるどうりきこゆるもあり。ま
さきのおのしろきうらいそのうへをいひ
つぐくるもあるべよろづよまぎらはしきこゆ

(イマダシキ)
(化玉)
(浦磯)
(西)

小一

源式物語講義

五

物の説のめく後間なるべし、されどもひて
何の嵩といそぶとも、
何ぶしる何ぶ侍べ
るべくこ同じ何とるる
べきやとあるふいと
よろし、

小ノ弟五節

ちのきおそ　良清の物語へ付ハ須ア明石の巻をか
きいづべき伏案へ○
ゆるび　河海ひろき
へとあり○おのく
ものさきのうへ播ア
の前のもへ明石の入道
のとへ○ちぶち入ル
釈門人也とあり入道
といふよおれ○いと
いふ　俗甚エライ

段の弟四節へ源後の山より糸の方を眺望しつゝ
へけるよ日たくるまでに」とあるハ上の弟一節よりまで暁
よ」といひ弟二節よ日たくさあるのりぬ」といひ下の弟七
節よくれかゝりぬれど」又二小段の弟一節よ外遊のいろう
霞うたるよ」などいふ人皆照応する文法へ引よい
とよくかゝれ」いのよ思ふいとうまさらせ給へん。
るどあるハ源ぶ須磨よ良清河播ア明石
て西をかきまるふ伏案へ。ちのきおそふ。
しれ浦こそたよ侍れなるのいとうふのき
くまはるけれど。たぶ海のおすてをうらこしたる
あれくるのさきのうへ志ぶちのせびあすづきこる
いといこしこ大王の後まて出ちもたべより
ける人の世のひぶものそ。ぶらひよせぶ。近来の中

(ヲチカタ)
(イマダシキ)
(化玉)
(浦磯)
(計り知られぬ奥ゆきと)
(殊)
(ヒロラカ)
(殊)
(新発意)
(明石のよう)
(入道ハ)
(立身出世)
(頑癖)

モノサヘ○近衛殿の中将をなさせて」式官八人の堂もむかるるをなさせていふまとりたるハ、世のひがものとなるり○切くすりたる山ぞみ」深山の住居へ○さるうみづらよりも」殺あるる海辺よ住むとへ○引のきさとハひとぞなれ云」深山ぞハ妻子も住ずきかるよ、海辺よあるるとりとへ○引つハんをやれる云」半分ハんをすぐさむる住居とへ○さいりごろまのりくぶりて」良清ぞ父ハ播广ちへかよ先般播广へ下りしの序まと

ゆをさせて。やがてをれりけるつのさるれどこの山人まもさそ」あるづこれてなるのめいぼくまでの。又邪まもこへらんとりひて。こ」ちも剃髪へおろ」侍りまけを。そこ」おくすりたる山ぞみもせで。さるうへづちよいぞ」ねるひぶ」きやうなれどげまのくまれうちよ。さも人のこすりみぬべきおくもありまぶら。ふるきさとハひとなるれいまぞく。ろのきさんしの思ひ出びぬべきまよりまりを人をやれる遣へまひまるん侍る。さいりごろまのりくぶりて侍る」つんでよ。ありさはこまよへよ

十三号五

○京まてこそ入道ハ京まてハ勢も有く思の侍まるざまるこへ○引そこらまるまよ云」多く入道の領して書よ家作をどしたるさはこ○殘りのまへひ云云」老屋の産業の跡石の巻よ殘りのまへひつくもべきい移のくらまちこへくとあるおめ」○中」ぬ」まさり」まのら」妻子ハあれど真の法師よりまさりまるとへ○代」この思のつあるさ」細よ猶思のあるハ一任四ヶ年よ交代をまへゆ思よ代」とこ云

よりて侍りしのべ。ふまてこそおゆぬやうまりけれ。そこらまるよいまめ」う志めてつくれまさ侍。さはいへどくまのはのさまて志抜きけるとまれど。おりのまへひゆまこまのよふべきんのまへ」ぬままくまこ。りまり。後のまへ」ぬはまめいとよくしてかくはう」まさ」たる人よまんまべりけるとやせぶさて。そのむ」めて。とこひのふけ」こハあ」ぬ。うまちんぶせまど侍るまり代」このくまれはあさなどよ。格別に用まして志て。心切をこせそ略るの上を無恥まれとへういてまよ志てさはんまべこまるまれどさこまよ。入道ハ京おせまへけひのべ。ぬ入道のんまのかくいてこまづめるだまあ

え○いづくよりか来づらむ。入道殿の受領となりて落ぶれたれば此女ハ世めてる伝の人の妻よりすぐれたるとえ○うみよりいりぬ入道殿よりの石よりいひやりたるとえ、入道殿のつげもあれば出ぬ母なるどもかなれのしとこゝろ、ゆめ、なる○海よりなを投げよと女よりいひおくさるえ○親人よりとしのうちうちの良清ハ親人にて今年の除目に巡爵にて従五位下に叙せられたれば良清のことゝ、うらふりとハ爵のことゝ、

一小段の第六節

ゆいごんやぶりつゞきんハあらんず。そてたくぎみよりの石のよりとんといひあり。いづくやさいふともみるのあびこんをさるくよりさるおよおひいづくふるめいたるおやよりのこゝろおびあらんハ。母ハ由緒あるべしとゆゑ。みぐけれ。よきこのうどこハなどの。彩のやんごとなきこゝろよりうるみよふれてあづるとして。カバヤカシク すバゆくこそりてなるれ。なるけなきんよなりゆのば。さてんやまてしめえおきこゝろどをやなどいふもあり。天ハなよんありて海のそこまでふるうおひいるらん。そこれみるめも物

良清ハ入道殿のゆいごんをこゝ入たる石の上をこゝ伝の人の妻よりせんとの心彩を破て良清おあるものよせんと思ふらんとえ○みなあびたらん。独ひふとゝもそ女ハ田舎ぶりてあらんとえ○ふるめいたるおやゝ。ひおくこゝき父入たよ養ハれてとえ○ふくこそこゝ。細よ松風の巻よ試族姓のるあり。こゝ○よりきこゝうこゝとこゝハ。母都より幼べきんをよびて伝るか都をまるぶとえ○なるけなきんよこゝ。みるこゝうりてハ物

人ちゝばとゝ○此のそこまでこそ」こゝ河をつゝいゝふゝ所は傍都此くぐのまゝくれと谷のそこまでほりいてゝ」とある通れど、こゝは入道はなぜ左ほどよ深く思ひ込ーなんとゝ、

一小段第七節

「れいの目」上の鳥名ゝ○此すのゝけ」夕良の者よ鳥名ゝ○こゝひはなほ」上人の河ゝ今夜はやはり都よ加持遊ばして明日朝よ帰りの事をいつゝ○さてこそをうーくて」源もさうはいつすのゝ

むづのうちなどの話ひて。あぐなすーくなすあの母（メンダウナ）

うりの。（侍供の人々）

こゝあるふゆゝ

とこのゝふ侍

やとゝてまつる」

くれいはるぬれど。

こゝあれ。

北山上人

いとゝ侍

まーけるを。

みりて。いでさせの

人々も。（源ゝ）

（源ハ大納言ゝ）

（源ハ人ゝ）

（源ハ侍ゝ）

（源ハ侍ゝ）

（源ハ侍

之、故按察大納言の妻なり○いとをかしげなり」尼天竜寺の巾の字之○四十あまり」孟云よそぢあまりと讀之○つらつき」身の容子之○ふくらかなり」肥満之○まことの法ど」目さしのやうにて○髪のうつくしげよそ」也○八重れ尼とて、髪のもそをそきて、ミなるそるとなり、尼天の髪のさまを云之

二小ノ弟二節

物とをふうり申」成角一人ハ少納云なるべし○白ききぬ云」白き衣の上よ山吹色を著たるを云なれたる

持仏堂の中柱之のはらよりみて。けうそくけうよ強をおきて。いとをかしげなる。尼天竜寺の巾の字之○四十あまり」孟云よそぢあまりと讀之○つらつき」身の容子之○ふくらかなり」肥満之○まことの法ど」目さしのやうにて○髪のうつくしげよそぎ

○このみゝるおとこ」上はきゝげるおとこ　なこ二人とゝ二人ある　ゞ、されバ少納云ん　○あらもとるどゝ云ゝとそ云てゆゝ」雀ちどゝ云てゝ云て尋ゝるゝ　○少納云のめれとゝ」ゝ母の少納云のさゝをゝ

二小ノ才三節

いで」イヤモウゝ　○あゝ」ア、ゝ　○母のゞかゝ云ゝ」尼云ゝらゞらゝの才のりゝあれもちらぬを上ハ何とゝもおぼさでてゝゝ　○つゝゝるとゝゞ」少路戒経よ

ざをして。さいちる（折）（孤）ゝそいとゝろづきるけれ。いづゝゝへ（雀の子いん）のまゝりぬる。いとをうやゝ（オモシロク）（ソロソロ）ゝるを つゝものをゝ（鵜ん）をるゞもゝそゝ川くれとて立て ゆゝ。ゝ（巣のノビヤカるゝ）ゝゆゝらのよ。いとるゞゝめや（ミラル、人）ちきひとゝる り。少納云のめれとゝゞ人いゝめゝるゝ。こゝ（巣上ゝ）こ

後見

のゝ　ろみなるゞ　二小段の才二節ゝ。巣の上 を惜むさゝゝ源姫てゝ。あゝゝ云いゞあるをゝゝるゝ。巣のゝ（いぬきゝの雀の子ゝゝゝ）巣の上をゝのゝゝるゝ。あすゝ ふゞひちゝゝのゝ。ゝるゝ。おのゞめゝゝゝあす よなりぬるいのちをバ。なゝゝゝ。おゞ。たらで ちぎめゝるひ孤ゝ。ゝゞゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

笹繋飛鳥ハ罪の一ゝゝ　といゝり○ゝちや」尼ゝ云ゝ巣を呼てゝちゝゝゝ　りゝゝ○ゝいゝゝゝ」巣尼云のゝよ付居 ゝふゝ○ゝむゝ一数 れゝ一ゝゝゝ巣のゝ 一生たるゝゝをゝふ ○ゝびゆゝん」ゝゝの ひゆゝんゝゝゝゝゝ ゝなりゆゝんゝゝゝ ゝ○ゝゝゝゝたゝゝ ゝゝれる」巣ハ薬壷 の兄式部の女ゝを ゝめひめゝるゝれバ 仰たるゝゝゝ、

二小ノ才四節

けづるゝゝゝゝ」巣ゝゞ 髪をゝゝけづるをいや ゞゝゝ○ゝゝゝめゝ

つぬよゝゝ（諫むゝ）ゝゆゝ。ゝ。ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

けれ」後目いてきえ手放ーてふあんじちるると云さえ○こひめ天皇の母え按察大納言の女え皇の母のことを何とおく物ぐるうのうちまあらんいとめでたー○たゞ今おのれ云く」尼天ゐづのうせもーあぶらえ○おぐろうよおるる」物よ怪されて何とおく物ーーるるえ○ふーめは目つきの色をおく え○おひたゝむの云」此云ハ若草を点の上よ云をゐづのうらの上よたとへているえ、さハ生長ーての行末の為著も知られぬ若草を後よ跡ーてハ、云の為のめき命をすゞ消ゆるるも消られぬとえ、若草といふやう云をといひ、云の縁偽よて消えんとゐるえ○すーるるおと云」見ハ上よおとるこ人とある人え、少納言と湖月よあるふ雅え、少納言ハ既よ言てゆくとあるを見べし○川川芋の云」見ハ川芋を点す、云を尼天よよせてうさて上よ若芋とあるを、此ハ川芋といひうへたるえ、さハ芋の生ちも知らぬあひだよどうーて尼天

こけれ。コノクライノトシニなれだいとこゝらぬ人もある物をこひめ天は十二ーてとのよおくれのひーほどいくゞうものハ物ぐるうきてありーとえ思ひきりめへりーぞすーだゞ今おのれうきてーてまつらバ。此ハのゞよくおとせむとさらんとていくゞくるるを。係るるるるそゞろよおるる。此のきれゞろうよおるるをぶらんゞ尼天をえうちまりて。ふーめよるるてうりぶーたるよ。クスミテフリカヘリこばれタル袋ノ毛ノかゝーたるるみ。ぱやゝとめでうゝる。尼天おひーゝむありるも去らぬうるをおくら後レアラスエを云ぞきえんそらたきまるゐる居おとるげ

ととうちるる泣きて。

川芋のおひ引まも去らぬまよいるぞこの為のきえんとさらん。とゐ。ゆる祖よ。傍邪あるるよりき傍邪何てこるるこいあらたるるや侍らん。りゝもいるおえ奥より出まるえ近き近りえ

しるるるれ。此上のこのこれひゞるるのこるよ。源氏の上人の方え中将のゞふやゝまるるひよるのしるひけるをだいるるんまゝつけ侍る。いゝゞう去のびるひけれでえ去り侍らで。此山まえ侍りるゞゝ。此とふらひるも。まるるまるでゞりはけるとのるへバ。尼角ある。いゝゞやいとあゝゝきさは庵を人やゝらん。とて。此の此屋のくゝるどゝるれつんえ簾

八清えんと呂呂さらんせあて姪夫の所成人をえとぐけるへと○あへりのひぬ上より小第伯のりとよえ知めるふ」とある首尾へ

二小ノ段五節

「そもいとうつくしあうつるえ」ぬふよりりの呂ふこうろうつきぬ」とうふ

ふまで八條よ源ぬ出上をひそのよ近ひとうめふ伏寄へ○みの人の所あいうよ

かの義壺よ呂ひるぬらひて義壺のあいうよへ下よ賜庶八○引ちふーめへるよ」既よ源寝ふよ助めへるよれ

ぬろーた。この世(俤物)よのく出られるよ。ひ◎る源氏。めくるついぞよえくまうてまうたまいんやよ知きそこ

る呂うーしのんちよ。いくこうぬ世のうれへ呂ぬよ(源をえまれなこと)

たひのぶる人の所(源)あさ海なり。いぞけせうそこゆえむ。

とそたり(俤都の)おとと出ぬばよへりのひいぬ」(二小段の第四節へ尼天第上よ十七俤物の出)

母のと物語(源ん)しめふ拙へ(第上へ)あまれるへ人をうるるぬ。これこの(俤物の出)

きのどもいかるあるきの知のくーて。よくうるはじ

き人をもうへ(付)くるあけり。たまうさのよたちゆる

ぬよ。おくーいひのの所のるることをみるよと。をうーう(オモシロク)

おぼとさてもひとうつくーうつるちごるる。なへ人(第上へ)

源氏物語講義　五の巻　十二

へ○俤都の所ぞーー」俤都まり弟子をいて案内をー入へへ○回どうきおるれどかやうよ物ーも拙ちきおるれむ。源のやうてす付のへさるへ○よきりおへーまーけるよ」源の出おく思り来へ出めへる由をへ○却どろきるおくーえ」狭へて早速俤都のまるへき答るれどくへ○うれたしくえ」俤都よかくれもばせのふをうれへよ呂ひて、手紙よ先出又まひを遠遠せーとへ○くーうの所むしろえ」鼻下の親へ源の所座をもに坊よ設

すらんおのの人の所あいうよ。ぬくれのるくあるる

へぞやと呂ふんふのうつきぬ。源うちふーめへるよ。

俤都の所ぞーー怪光をもびいでさに泊どるきおなれど。源もやおてゆるへふ。(俤都の使の弟子の泊へ)ようきうおふーまーけるよ。

けるよーー。たぐ今うるん人ーきよ。おどろきるぞら

さふらぬべき弟。(俤都をいへ)るまおーけるよりゆるとふ。

出ろーめるぐーう。思びさせーるまへるをうれきし

く呂ひめへてるん。くうの所ーーうもぬだうるきそ

まうけ俤るべけれ。いと泊(本意ナキ)つるきこくーめへ。

いぬる十よ目(去ル十會ハ)ひ泊どうーうふやうるぐーひ

くべきをとゝ〇ろう
やうなる人のゝ」かやうゝあふとき上人
なれバ万一効験なきに附
ハ是近の或徳ゝかさ
しひくきて不都合な
らんそれゝ口の人よ
りハ先の毒ゝ恐び
てものゝたるとゝ源の
羽之ゝのきさまゝ〇
いまゝるゝこゝ」布の
ゝけゝて思ひたるな
れど辛ひよ快方なれ
バ今ゝゝ方へゝゝ多りな
ゝんとゝ

二小ノ才六節

ゝゝゝゝゝゝれど云ゝ」是
より伊都よ弱角
ゝひての源のゝゝ〇か
くゝゝれるゝゝどの云ゝ」

伊都を。ゝびあさなりてゝ堪へぶ雑ろう伊れバ。人の教をゝゝへのまゝに。ゝゝ伊よ比上のゝゝゝゝゝゝ

云、牛頭栴檀などと名ある香を云べし。○よのつねならぬ香を云べし。伊都部源氏に香情のことをとき少せのふ狀に。○ひるの御つとめの程など。源氏に盃のことなどおもひあてゝ。さて云ふ所自分の罪深きことゝとゝいづきのふに。○このやうなるもまひ九。源氏は世を味気なくおもひて。かやうの道世の山居をせまほしとおもふものゝに。○ひるの面あげ。屋のぞきのひゝ時のはゝの上のおもあげ。高くしよりの。○ひるの。源氏いひ知んたよりなければ。義のきゝなすことの

ちるよ。源氏の御の陰の追ひ風。おひあぜいとゝとるれば。うちの人人もんづのひとべあめりそうげよりつよなきの御物語。後世のちれ世のことをとるどゆえまこせこまふ。源氏ひるの御つとめのほどおそろしうあぢきなきことよんを云あて。いけるものぎりこれを思ひなやむべきなめり。すべて後の世のいとゞおそるべき法おぼしつゞけて。おやうなるまひ九せまほしう。見直のふりもの。モノハ。ひるの面あげころよりて高くければ。源氏伊都部なとて浴室のつゝ。はれるあ。アラ。づねきこえまほしゝきゆめをみるまへしられぐくんん

のゝ。○思ひあてせつる。今日始てみし義を思合せつるとゝ。○御ふねおとり高。伊都部ハ尼天のことを源の高のふと思ひての義。○別按察大納言是より伊都の物語。大納言ハ尼天の夫。祖父。○ごろ高。僧都ハ病気にて。○ゝく高ゝ禁思ひてあるをいふ。○たのゝどころ。妹なれば尼の方に同居して作ゝ。○ゝの大納言のゝむを。源紫上ハ尼天の女なと思ひのふかよ。何となく問ひのふ。○思

思ひあてせつるとき。伊都部源氏ばうちらひてうちつけなる。義ぶこゝろまそ作るる。ゆゑ。考へ。御ふねおとりを。死亡シテ。よくて久しく。孤伊都源氏ばえ。源ハ知りすゝみ。妹。しめさじあのあぜちうくれて。尼。世をそむきて作るぶこのごろこゝづらふと作るようく。京まもまでねぐ。のゝどころよこゝりてのゝ作る。伊都同。りと少。伊都源氏の大納言のゝむを物語のふとやうこゝ。ハ。ぶこゝこゝあて。

まめやかなるやうゆゑなりとおもひあてまつるべかめり。（俤河）
（若く）きさめたくひとりゐたりしかど。（一人）（女死テ）それは十よ年（ヤ）
なりけりぬんが大納言（ハ）（此女を内裏ニ）てまつらんなど
（ダイジニノダテ）こういつきけるをそのはいのこころも物
しけらで。きさきは（大納言死去ス）（養育）
ひとりもてあつかひ（父の本意ス）
のこりなきの。兵部（宗上の父ス）の宮なんきのびてこらひ
つきめ入りけるが。ものやんどるくな
どしてやそうぬとおほくて。あけくれ物を（誰ガトリモチテカ）（チトオソロシクス）（朋夕ス）
思ひてなんなくなりけりとぞ。（俤河）

（俤河）
ひづくり物。とめよちのくらるへしなどやのこふ。さ（源）
さてハ尼天の孫ニと聞ーすらばそのことなりけりとおぼしあてせつ。みとの内
きぢいまていおのいとくいあれまはしくいとくあれまはしくいとくあ
をしう。ぬくのさのくらんるくうちこのくさら
ひて。んのまくまをしへおぼしあてくこそぢや。
とおぼしいと。（源河）（ちは細のようなものをと思ひてまつる向ふ）（を女ハ子ハ）
どめ給ふこうこみも。なきこのとこ（ほのぼのの上の行へ）をさるみのりつるゆ
くへのすほしこのよ志つまはしくそひのへば。
なくなりけり。（女死去のお生れ一子あり）（その子ハ）（俤都又差ス）

きこえ眼目こゝ○それまつけてもの思ひの尼天ハ
思ふ上をゝゝる女よ女のことを思ひ出のふとこゝ○
されぬとゝ上よさらばそのごゝろ」とある首
尾こゝ○をゝゝる思ふ
しろこゝよ」源氏あの後ゝ
きべしそのゝと尼天ハ侍
へすんやとこゝ○思ふ
ありてこゝ」源葵上
のゝゝ思ふとこゝ
ども思ふとありとこゝ
○すぐるげるき泡ど
とこゝ」小構云源氏を
世のきれ人の思ふ様よ
笑してまご仏つのふ
ゝゝぬ齢ゝれたゝ
とおくやえさん系いい
ゝせれ交のゝと紙思ひ

女ゝてぞ。それつけてもの思ひのゝよ
なん。尼天のこゝ
ゝひのゝるゝよおもひのゝるげき侍
と申匠のふ。源氏
ゝれどをゝゝ
匠のゝてんや思ふんありて。葵上のこゝ
侍りるぞゝ。源と葵との仲ゝのこゝぬをいこゝ
ゝてのゝゝる
よおぼゝる
ば。僧都詞
よいゝげるき
ゝ

ゝゝ女ゝ人ゝ人のゝゝゝゝ
おとゝゝゝ
取切りてゝ
匠ゝせん。ゝ
のゝれた。源
匠ゝ侍ゝ
ゝゝ侍ゝ
ゝゝ侍ゝ
ゝ

三小人第一節

石たゝき〜うちそゝぎ山風ひやゝかなる音〜」細よりも高の山中のさまゝとあり。雨ふりかゝき出たるなり。源の者ちゝ〜ゆるさせゝ〇ちゝ〜ねふ〜げなるど經」細流より引声の阿弥陀經なるべしと云〇ちぐろなる人」盂よりそめぬくを表なるゝとあり〇ちどろまれのふべ」ねられのゝぬゝ〇ぢぐのけうそ〜に」細よりく〜やさ〜き樫づよぐる珠数の脇足ゝるさいりておとのちゝる〇あてゝるの」あてゝハ貴

物語のうちよ。ねのづゝうよあふ〜したるハ。命の文法なるぐらうへもくるめでたし。ゑハんちもいとなやまし〜きよ。面ちゝ〜うちそゝぎ。山風ひやゝかなるふもつきたゝる。源のよどみ響もまさりて。音たゝ〜ゆゆ。ちゝ〜ねふ〜げなるど經のあえぐ。オソロシクちぐ〜きこゆるど。ちぐろなる人ワケモナイもおろしものゝ表なり。源ハ云ハておもひ〜めぐらしたとおぼゝて。まどろまれのふべ。そやとイヒ初夜しのどもいねもいと甚更しうふけよけり。うちまもる尼天のうゝ人のねぬけそひしゝて。いとゝ思びしれどぞぐのりうそくよひきなちさるゝおとゝのゆゆ。なつ〜ユゲニうゝ寄ちゝ

ゝちゝのハ計ゝされどちゝのハ源そいふ言よて。貴といふ所どのをゝ。あさゝるのちどゝゆゆ物ゆ〜〇祇もるゝちあけれど」源の寝のふおよう女房達のおへもも近きさゝる〇あふきをるら〜」人をめしのふよ扇をるゝ人ゝ〇ちぐ〜ちぐきて」少納言人もみえぎれをひお耳ゝやとちゝ〜ちりぐ〜さゝる〇ほとけの所ちゝべハ云」湖法よ佛ハ冥途よゝ〜ふ衆生をもゝ存きのふちれば遠ふべゝちぐとゝ源の扇をるら〜のふをお納言ひぶ

ザワツクそゝめ〜おとゝるひあてゝるのゝりとゆのひて。程もゝくちのければ。外ゝよりそゝ〜たる屏風の中をちぐ〜ひきあけて。あふぎ扇するしのゝへば。女房ダチノハヒおぼ色ゝるきこゝちちぐ〜あめれど。少納言ゝ人きこゝちぬやうゝた。とてゝるぎり出るひとあるゝ。ちぐ〜ちぐきて。あやし〜ひぶみ〜ゆやとたどるをきて源ひて。源ハ何とけのきちるべいくらきよいりてもさらゝた

おふゝぐあなるものをとのゝ言ふぐ。ちぐのいと甚あうあてなるゝ。貴ゝ少納言ゝ恥うちいそんこはづゝのひもゝびあしけれど。少納言ゝ何いろゝるゝ仏のちぐべとのゝ〜ちぐけて云ゝおぼつ

耳ゑとゝとるなよ
ひぶ耳よ聚洛とのゝ
をきらせのゝふるべし
○たゞくさの命氏を
ハ遷見の附尼天ぶ為
そをとよめるを、想ば
しゆてよゝのふゝ、さ
ハたゞその空上をみ
しまう、源ぶ旅ねの涙
のひぶゝきとゝ○去
ろしめしたりげなる
我」少納言羽まで氏相
の所せうそこ家る人
もあらぬさまハ、侍数
の内物語まも知りぬ
らんを、注まとそ物
えのゝふるらんとあやし
みゝゝ○相のづから
云ゝ」源羽ゝゆゑみて
やと思ふれよとゝ

あるゝ。ときこゆ。げよう(源羽)ちゝけなり。とおぼめ(トボケ)
きゝ給ん。もとゝ(理ゝ)ゝうるれど。
源
たゞくさ丸ゝこの袋ふのうへをこゆるより旅ぬ
の神も寄ぞあるゝのぬ。ときこゆ(取次てゝ)ゝ邑あるひてんやと
ゝ。少納言羽
ゝ。さらよあやうの所せうそこ。けのハりと
くべきゝもの。ゝ給ゝぬさゆハ。ゝろしめしたり
げなる我。れゝるゝは。ときこゆ。相のづから(源羽)さるや(アラン)
うありてきこゆるらんと思ひるしめへあゝ。
とのゝへハ。いりてきこゆ(少納言ゝ尼天ゝ)
ゝをめしのふ拙ゝ。尼天ゝ
なるいかゝ(コトヤウナ)。ゝ(ヒトゝ)ゝ天やよゞいるほど

三小ノ才二節

よゝいゝるゝとゝよゝ」
源ハ空をちとおとる
しゝゝ、おゝゝたゝりぬ
へらんと尼天の思ふゝ
○ゝゝゝらゆふの命」新
釈よゝ初ゝの命とゝう
いらへゝよゝゝるゝを
ハ、たゞ旅ものゝるゝと
りるゝてゝとあり、
きハゝゝるゝの所旅ぬ
の為けきハ、今夜斗ゝ
るべけれど、ゝ山よ住む
神の上をゝしゝくらべゝ
へゝゝ○ゝゝめゝゝゝゝ
云ゝ」源人侍るらで実
よゝたきとありとゝ
○あゝゝ天ひぶゝと云ゝ」
氏をさるきゝ人のゝるを、
源ハ何ぞゆゝのふらん

よゝおゝゝるゝとゝぞおぼゝらん。さゝるゝゝてハあのゝゝ(尼天のよ)
ゝゝ命
ゝゝ我いのでゝきゝん(源うけ)のゝへゝるゝとゝぞ。とさゝ(ゝ)あやし
きゝよゝ。ゝゝゝれてひゝゝゝ(時刻ゝゝれハゝゝ遅ゝゝ)ゝゝなれゝるきゝけゝるゝゝとゝ。
尼
ゝゝゝらゆふゝゝゝひゝりれ寄けゝ我ゝゝやゝのゝ
けよゝゝらゝゝゝゝ

とも○そこ〳〵にもてなすもの
ども」尼天はたゞ〳〵ものたまふ。源はつきなく思ひ〳〵呂さんと少納言などのやうに、

三小ノ才三節

げにこのやうなる人こそ」尼天はきく人なども面もてるい迷惑とも○うちつけにこそ」うちつけにソッジニ、あさましのハ浮きさま、初冠面にあさきやうに思ひ〳〵呂さん序なきどく○俳ハおのづのならぬんざ〳〵ハさりとも仏ハ照覧あるべきこと○あさ〳〵ハいうぐ」歳くハいうで思ふべき

とのの人ばかり（フツガウニ）たるこそおぼせ。と人〳〵（少納言ナルドモ）やゆ（三小）段の才二節に尼天ちり。源へハ家のもの〳〵をきこえ（源のまち実ものふに若面なるハ名あり）ぬ。げにこのやうなる人こそうそもあらめ。まめやかの（源の孫ふ）ものこゝけなし。

とてあざりよるきの人（尼天ニ）りとれらんぜられぬべきついでなれど。つまは（源ハ）あさいろもえぬと）さもおぼえ（源）ぬぞ。佛ハおのづのならとそ。おとる（尼天ノ）おとれ（キツトシテ）ゝうちづのゝ〳〵げなるまつ（恥入テ）まれて。とみまも（源ニ）えうち出（イヒイデ）めふぞ。げに思ひ（尼河）（オモヒヨラヌツイデニ）よりのぐきつんで。かくまでの（源のるをこ）せゆを（源）さもそるも。あさくハいいのぐ。とのの（源）あきれ（源）ようけのるハありさまを。

とも○源の母のるこ
ひけんはのそり」源を過去りのひ〳〵母の代りに思ひめせとも○あやゝうきたるやうにて」ハも為つのぬさまも○却れ〳〵さまよ云〳〵」今思ひ母よちやく別まの人ば源氏系と仏合られば偶ちさせの人とも○かるをうも云〳〵」今までついでなくてやさぬとも○おぼされんふをも云」何とある思呂さんと源なるぐらとも○きこゝめひおめたる」ゆ遠ひの人るるやゝとんぼハんもをさるきをよつきた

源の母のるこ
のちぎのひよりんはのそりよおぼす（ナシテアラブヨ）るいてんや。
いふ源ハ少年の折よこのひなきを紅のよこひよそ。むつまし母の交衣よ立おくれしとこ人
ものもちおくれ伝をよけれぞ。あやちうきたるやうにて年月をこそあさこね伝れ。おるぐさはもものゝ孫なるを。ものぐひよなきせるまへとい。ときこと色母ゝ母ゝきに。かくるをうもありぐくてちんお
ぼされんふをもこぐらぐどうち出（ヤシ出シ）伝りぬるとき
こと色の人を。いとこれ（左やうよ思ふ人のいとあるぐこゝ）ハう思ひるまへぬべきハと
るぐこも。きこゝめひおめたることなどや伝らん。とつ（恥カシキこ）ゝうちん。あやしきを（尼こ）ひとつをたのす

人よりまさる人なん侍れど。いとすべいなくおひたちぬ。
まして。世にはべらんよりはべりてこそ
なんうけめとりとぶめられざりけるとのこと。
うれおぼつかなくあらびけうるものの和と
ろせうおぼつかなくこそでおぼしめしまさ
となるかのほどを世にはらんぜ。ときこえ
ど。いとまげなきことをさるものでのこと
ぼしてんとけうるいらへもせず。僧都おきし
ぬれば。ほうえそめ侍ぬれば。いとこのも
しうなんとておしたひ法三三小段の第三節
源氏物語講義　二十

をたてまつるべし、と四位よりいり、

三小ノ第四節

法花三昧三昧ハ梵語ニ晨朝の行のなり。懺法智者大師の所行ニ六根の罪を懺悔する法門ニ。ふきまよ
ぬのあ」をあきらけしかしは
樹よ、せん法の夢をまて煩悩の義さめぬる
ぬちをとりふきをふ
くめて感涙を催ハ
あるなりとあり。さ
しぐるるよの雨さしぐ
るるかとよりけて
いつこさしハ俗チツ
トこさいあるくハけ
さまをチョットこそて
源よ袖をぬらしまし

源よ第四節面をあらはしる。源ふ上のことを問のふ侍ふ。嘯ぶいいいいいければ。法花三昧おこなふふ堂の懺法のこと。山おろしよ
つきて夢をくる。いとこと尊く。たくの侍ふ。
きあひたる。
源
ふきまよふこと山おろしよ袖をぬらしまし
ほくるあまれおとこと。
侍都
しぐるるよ袖ぬらしける山おろしよ
拙僧ハ法の第四節ハ
ぬきやふ。みくたれ侍ふよりやとこそ
三小段の第四節ニ。嘯ぶいいいいいけれ侍ふ。
侍都と申ふ。みのふいさ侍ふ。明ゆくいいいいいと
う震いて。山のあるどもそこいとなくさひづり
源氏物語講義　二十一

お、拙僧ハ耳ちれしる
船の者よ山住の伊ハ
さるぞぬとえ、

三ホノ才五節

明ゆ〜ゑふ」上の嘲ぶ
〜よちりよけれバと
あるそ尾ゑ○ひじを
うごきさもえせぬど」聖
の拙ゑ」小段の才一節
よ、老かぐまりて室の
外ゑまもまでびと云
〜そ尾ゑ○かれ〜る
〜ゑの云〜」老て枯び
たる声ゑ」河海よ歯落
ぬれバ声のもゑ〜ひ
おめる老人の〜ゑ調
子よのきたる心ゑ、と
い〜り○よゑえぬ
さまの内くぐゑの」山
家の珍ら〜き産物ゑ

あひたり。名も志らぬ木ゑの花ど。いろ〜よちり
まじりて。〜き況志けるとゑるよ。志のれ〜ぞゑ
ありくゑめづら〜しく〜ゑ。ほ（ほゑ）ゑ。なやまし（ほの瘧病ゑ）さも
まぎれそぬ。ひじをうごきもえせぬど。せゑ
くしてご志ん（護身ゑ 加持ゑ）まるらせゑ。ふれたるゑのいといと
うはきひぶめるも。あハれよぐづきて。だらよみた（陀羅尼ゑ 梵語ゑ 功の付てゑ）
り。ほ（京より源を伝ゑ迎ゑ）ほ。ゑの人〜まるりて。おそ（瘧ゑ）ろうめ〜るよろこ
びきゑ。うちまつる伝ひあり。そう（僧都）ぶ。よゑえ
ぬさ海の内くぐゑめなゑれと。谷（さま）のそゑまで
ほりいでゑ。ゑきゑ。ゑ（今年ダケハ）だゑりの

〇谷のそゑまで」ゑ〜」
伝教深く心配して珍
物を求るさまを云ゑ
〇ゑ〜ゑ〜だゑのり」ゑ〜」
是ハ千日籠るどもゑ
さまゑ上の一小段才三
節ゑ」ゑ〜ゑ〜」と
あるゑ照ゑ〇ホ〜
ゑ」氏家面ゑ」ゑう
れ〜あれど伝送りを
もせで別きゑ〜ゑ
ゑのゑ〜ゑ〜さと
ゑ〇ゑ〜ゑ人ゑの歌」を
あきらけ〜、都人よ
行て語ラウワイ」氏桜花
の散らぬまゑよとくき
てえるやゑよとゑ〇
ゑ〜どんげの歌」仏説よ
優曇華ハ三千年一現ハ現ハ
則金輪王出ゑ云ゑ源の

禁足の
ちゑひふゑのゑ〜ハ伝りて。伝ハ歌ゑりて。ゑ
ふゑすぐきゑとホ〜ゑ〜ゑ。ゑ見ひゑゑ〜ゑるべきゑれゑど
ゑ色ゑひて。ゑ酒ゑ〜ゑきゑまゑりゑふ。山ゑ間ゑよゑろと
ゑを伝りぬれど。内ゑより市のゑ酒ゑつのなゑぶゑ〜せゑまま
〜ゑゑゑ〜とけれバなん。いまこのえゑゑのをゑりきぐ
さびゑまゑりゑん。

源ゑ
ゑ〜ゑ人ゑゆきてゑ〜ゑ〜ゑん」山桜ゑぜゑりきゑ
きてゑゑみゑぐ。ゑの花ゑ内ゑのゑ山桜ゑぜゑりきゑ
マデモ見ルモカバハユクスグレテアル。
さ人めゑゑあゑゑゑよ。
伝教
ゑ〜どんげの花ゑまちえゑゑんゑ〜ゑ〜ゑゑゑ桜

出ハうどんげを花ハ
ゆたかなるとおもひ
梅花ハ整なれど花な
どる目ハ移らぬとな
○ときありて云ふ源
うどんげの聖僧都の
御ハ似合たるをを
あしとおもしてきう
どんげのめくかるる大徳
をえなるハ容易なら
ぬ因縁なりんとな○
おく山の奥花のこの
ハ源をきしていとまを
を奥山の松の戸ハつる
ハ明ることもなきを
なハ稀よあけてえし
こともなきうつくしき
花の鳥をみるヂヤナハ
と源の御歌をこの
けるとおもふさまを

よ免こそうつらぬ。源ゆをするへハ。源ゆ。ゆ。河をとき
りてひとあびあらくなるハ。このるふものを。と
乃ふ。ひじりと加持の聖ハ。盂ひらけのふりて。
聖
おく山の松のとぼそ
ぬ花のあるをを
つる。ひじりと安獨鈴ハ。
徳太子の百済くらより
珠
のこの装束ハ飾りタルハ
れるこの箱幸櫃
いまして。五葉松の枝よ
ふの枝よつけて。

○このひて云ふ聖の
独鈴をるを見て僧都
ハ源よ物をるハ○こ
んりのつぼ紺瑠璃
の壺ハ○義さくら古
へハ物を人よなるふ
本の枝をどよ付てな
るハ春のををなれば
義梅の枝よ付てなる
なるべし○やまのゆ山
家人ハ山家人よまで
物ハ下ハ

三小ノ段六節

うちよそうげ入のひ
て僧都ハ入て尼夫
よ源ハ上のるををきる
ハ○さるんと相ハ
きあ上尼夫のやうよ
やさるハと源へ僧都
の侍へらるハ○外

薬
ちくりどもいまして。義さくらなどよつけて。ふち
山家お花のものをまるハ
こころよつけるる所おくりものどもさいげをるハ
ふ。源ハひじりよとりそこめど。読きやう紙ハつるほうしのふせ布施
設
まうけのもどもさあぐよとりよつのハしこうりけれバ。京へきしのふハ
そのこころりのやまでさるべき物どもあまひたぞ
強るどして出落ハ三小段の第五節ハ聖ハ乗りて僧都聖よ
うちよそうげ入のひてこのきこえ強ひしとまひ
きこえのへど。尼河とかうもたぐいまいきこえんこと
ハる。ハ。源おぼ。ハ。ハ。ハ

まぐれの雨」雨のおよ花の色をうばいはのひまらのことを下よふくめたるゑ、ゑ、はタるゑ庶よ花の色ばかりをうばはしたるめく見ひ炬ふとゑ○雨ことゝやの雨」あをむるよふあふよいそぐしてそれとなく云ことゝいひあをむるを霞よかけたり、主ハ城であるあ花のあゝりハ立うきと雨ののふことハよも微くハあるゆ、けれどそのけしきをマア見やうとゝ、

三小ノ才七節

雨むらへの人〻」雨を

こあるを。雨いなハ（ハ少さナシトゝ）とおぼせ。雨せうそこそうべのもとるるちひさきことらふして。

◎少◎童◎

外まぐれ雨のあよ花の色をうそけさ霞のたちぞうづらふ。雨ゑ。

尼雨ことゝや花のあゝりハ（書蹟）ちきとあをむる雨のけしきをもうん。とよしあるてのひとあてなるをうち（貴ゝ）（トリツク）

三小段の才六節ゝ雨と尼ゑと雨くお（ロハズ）そそ。いゆゆ（三の婚姻ありて。立ゆられ。ゆふさうまるり。雨の公ゆふ）車ゆたそ。ゆつる祖。大殿よりいつぢとゆなくておハし（桑上の父ゆとゝ）ゆまるけることそ。雨むゆへの人〻。公達ゆどあゆまゝ糸りゆゝり。雨中弁。さゆぬ夫ぐちゆもゆゝひゆを（結大殿のきんだちゝ）（きん）

雨迎の人〻ゝ○あさ。ゆまゝくおゝらさせ云ゝ」雨の誘ひゆハぬを恨ゆゝ、君ハ雨中ゆ左中弁等のゆゝゝ○いもかゝれの芸のうゝ」岩陰の苔上ゝ○とよらの寺のゆゝるゆゆ」僧馬楽をとりてうたへゝゝ僧馬楽葛城ゆつらきのゆゆへなゆゆゝとゝらの寺の西ゆるゆゆゝゆゝ井よゆゆらゆゆゆづくゆゆゆゆゆゆ細流よ山寺よハ侯ありていとおゆゝゝゝといへり○人よりハとゆゆ夫ゝち」皆ゆゝくひゆゆ夫上人ゆれどゆ雨の中前

てかうやうのゆとゆハつゆうゆゆり侍らん。とおゆひゆふるを。あさゆゆゝくおゝらさせゆへるとゝ恨きことを（アキレルヤウニ）（ミゴトナ）てゝいとゝゝじき花のあげよ。ゆづゝゝゆやゆらハぜ。立あへり侍らんハあゆぬとざゆれ。とのゆふいゝゝぶゝれの芸のうへよなゝゆゆゝ。ゆゝゝけまゆゆ。おちゝゝゆゆのさゝ雨ゆどゆ。◎ゆゆ。◎ゆゆ。◎ゆゆ。雨中ゆふとゝゆりける笛とり出ゝゝふきゝゝゆゝゆゝ。弁ゆ夫扇（孟ゝ）（ナニトナク）ゆゆうゝちなゝちゝて。とゝらの寺ゆゝゆゝゆゝ。とゝゝふ。人よりハとゆる夫ゝちなる雨。源氏の夫いゝゝゝうちなゝゆゝ。岩よりゆゝゆゝゆゝゆゝゆ。ゆ（甚）（悩）

ようてハけおさるとゝ
○例のひちりきふく」
いつも此供よ篳篥拍
て糸る酒身するべし
○さうのふえもゝせ
たる」是も酒身の中よ
笙を吹人なるべし○
山のとりも云〻」上の
才五節よ照応ス孟
云、列子よ瓠巴鼓琴瑟
鳥舞而鳴魚躍而遊
矣とあり○げよゝく
のらぶ云〻」湖月よ上
手藝の不望よ志こゞ
いぬハよくき物なる誠
なるべしとあり

三小ノ才ハ節

いふあひなき云〻」
なんでもなき法師
童まで也〻、俗都のう

ぐひすくゆ（エライ）ときあり酒よそ。なるどよりめ
うつる酒ごすりける。例のひちりきふくざいぎん。
さうのふえもゝせたるまそき（風流人）物などあり。俗都き（琴）
んをゝづのうもてまゐりて。（俗相）これたぐ酒もひとりあ
そぐして。おるぐくは山岳とりもおとろす俗
らんとせちよきゝ色のへば。（源氏の後ひて孫なる之）ゝぐりゝちいとゝへ
ぐゝきものを。とゆえあまへど。げよゝくのらぶ
あきならして。こゝ一同（立去）これゝちゝまひぬ三小段の才七節へ。大原
のくゝ改中拍左中弁なるど（源の立去のふまを）酒近よまゐりのふさまへ。あのぐくちを。とふ
あひなき酒ゝしらぶもすゝぐをおとしあ

ちの泉之○おるほさ
酒なるぐらいとむづあ
しきりのもとのを
ゝのよは」四注云上の
俗都の家よ光源氏を
優曇華よゝとへて輪
王の如世よせたり
ゝよ又俗都の氏何あ
ゝ○めおしのぐひ
のゝ」俗都感涙しのふ
之○気でたき人のな
とえのひて」はよ如き
心なる酒をめでたき
人ヂヤナアとえのふ
之○おのほありさ酒
よりも云」はて上ハ酒
父兵部卿の宮よりも
酒をめでたしとえな
ふ之○のめ人のほこよ
ゝ」源のは子よなり

へり。すてうちまふ年おいてるあまむさゝ（尼夫の泉之）たちな
ど。さらよかる（源之）人のほありさ酒をゝぐりつれば。
この世のものとゝもおぼ色孫さびときこえあ
りそゝ（俗都）もあまれなるのちぎり（因縁）そかくるほさ
酒なるぐらいとむづゝきのもとのを色のよう
（源氏）まれるひはらんとゝるよいとなむおるゝきとて
めおしのぐひ孫ふこの（はは上）ゝ天をさゝるぐちよ色
でるき人おれとえのひて。（父兵部卿の宮之）おのほありさ酒よりも
まさりのゝるおれるどの孫ふ。（尼夫の女房の汎之）さらばあの人乃
ほこよ物ておゝ」ませよときこゆれど。（はは上）ちち

のゝへとゝ〇うちうなづきて」少し思案して
ゝ〇ひゝなあそびよ
ゝ」ゝ上雛遊びよる画
かきのふるも、見ハ源
ゝとて墓ひ住へのゝ
ゝゝゝれ後よ源の本
夢よたちのゝ仕業ゝ

四小ノ才一節

いゝといゝゝゝゝよ
ゝゝ」帝源をゝて容
貌を甚衰へたゝと
ゝゝのふゝ〇ひゝ
ゝの」小山の聖ゝ〇あ
ざりるゝゝ」七高山
の阿闍梨とて比叡山
比良山伊吹山愛宕山神
峰寺金峰山葛城山よ
各あるゝ細流よゝり

うなづきて。いとようありなんとおぼしたり。ひ
ひなあそびよりも、ものいのふるも。源氏のきゝと
ゝゝあて。きゝゝなるきぬきせ、づきのゝ」
三小段の才ハ節ゝ。別世を惜ゝなる事。源内裡
よりのふゝ。是迄を三小段落とゝ。さて小山のことハ
一段ゝて全く移りたれど。此段源氏物語ハ
ハ紫上の傳の序のめきゝのゝ。実ハ源氏ゆよりあり
のそ。ひゝろの所物語などゆゝのふ。いといゝゝおと
ろへよゝり。とそゆゝしとおぼしめしたり。ひゝゝのの
たゝとゝりけるとなどゝゝせゝるゝふゝ。源しゝく奏し
のへば。帝の病ひ
ゝりなどゝもなるべきものゝそあめれ。
おとなひのゝらうハはゝりて。御延ひやけよゝろしめさ

四小ノ才二節

ゝゝむのゝよもとゝゝ」
ゝ大王殿源を迎よ
とゝひのゝつれどゝ〇
ゝのびたる所ありき
よゝゝ」源の思ひの所
ありきよ大王のおハ
さんすハゝざと遠遠
ゝてゝゝ〇のどやあ
よ」二日ゝゝ」ゝ大王
ゝ方ゝて所終息ある
べゝと源を誘ひのふ
ゝ〇匂づのゝハゝゝ」
源を謂よのせゝりて
匂ハ奥の方よ来る
ふゝ〇殿よもおハ
ゝゝとらんと」ゝ大王殿
ゝ上の方ゝも源のお
ハゝゝゝゝらんと
思ゝて源のゝゝ

れざりけるゝゝ。ゝゝふゝとおりの孫たゝせたり」四小段の才一節ゝ源帝よ所物語ありて小山のことゝ細しゝく奏しゝ。御ぼゝとの糸りあひなひて。ゝゝむゝゝよりもと思ひ延へつれど。のびたる所ありきよいのぶと思ひたゝりてゝんのどやゝよ一二日うちやゝゝゝめゝて。やゝて所おゝりつゝふゝつらんとゝゝのゝゝ。源ん。さゝゝも御ぼさぬどひゝされてゝゝゝでゝゝゝゝ。左大王殿ゝ源を安せるゝゝゝゝゝ車よのせゝてまつりるひて。匂づのゝハひきいりてゝてまゝりきり。ゝてゝゝゝゝ。左大王のゝ。源ん。ゝゝゝゝゝゝゝゝのあゝれゝるをゝ。

足のいぬ間よ立流よ修繕したまへ○はいかのたひのくれて」例の通り恥のしがりそへ○おらうきてゐたうのへり」ヤツトノコトデ葵上源の方へゐたりのまへる○たゞゐよかきたるゐ」葵上の動きも志のふぬさまをゐへ画まあける姫君のやうにして居られて、容易よ身動のしも志のふぬと之是はあぬすりまあかしげるをゐへ○をのうちいらへしあり」源ホ山の物語ゐるど聞あせんよ葵の御も志ろがりて問

しまをらんとつづのひしめひてぞくしゐまぬ泪どぞいとぐおのうてゐまこぎ志川らひよろぼをとこのくへうまへり女君葵上れいのたひのくれてとみまもいで給ぬを左大臣おとゞせちよきこゑのひてぞおらう志てゐたりめへり。葵上のさまたゞゐよこきたるもの〜ひめぎこゑれやうよ志そゐられてぞちこゞろき給ふことも加こくうるはしうてものしこまへば。源のんゝおのふことも加ソレトナクイヒうちゐるもめ。やまこうちれ北山ニ行キシ物語をもきこえんよぞいふこのひありてをこのうちいらへしあはいぐこそあをれゐらめ世よはんもとけば

ひものへしゐるども志のふやうゐるば一層カハユラシカランとゐ○世ゐふんもとけば云ゐ」源と葵の中はんもとけば葵上はうとく恥のしきものよ思ひてあるとゐ○閑こそろのへぐそ云ゐ」年の重なればやうゐる睦ましくなりゆくハ夫婦の情なるよ葵上との中はんの隔もまさるハ案外なると源の思ひゐ○とハぬはつらき」引おゐ奥入よ之をいのぐ思ひんくよとをいらせてとゐぬはつらきものとしらせんとあり出志のさゐ

うとくきぬきものよおもはしてとしのかさなるゐそへて源こゐろのへぐそもはなるをいとくるしく思ハぞりよ。源ときぐハよのつよなる所気色を案外ゐ源の病ゐこゐやうぐうるひらひ侍しをもいのぐとだよとひたまハぬこそめづらしゐらぬとるれどなほうらめしうとゆえのふのらうしてとゐぬはつらきものよやあらんと志りめようおとせのへる目ツキまみいとゐぐのしげよけこのう言りくしぎな貌ゐ所ゐちなり。源ハあきまりの所とやとはぬなどいふきゐくこと他人ゐよこそ侍るれいうくもの源ひ

主ハ源ガらひ仰〜を
ものとひのゝぬぶ恨め
しと恨ゝの〜ハ葵も
源の葵をとひのゝぬ
をつらく思ふすを
思やりの〜とゝ〇ぜ
れく〜ハたゞ〜のの〜ふ
ゝ我ものやうなるる
よとゝ〜か妻などよ
とゝぬハつらきなどい
ふゝとハあゞ〜さとと
源の思ひ〇いのち
だゝ〜ゝ〜ゝ細ゝ〜ゝけ
るゝおいく〜あらん盃ゝ
引そきらぬ今ハみよ
命あらバあやうきを
るゝ人やとゝぬとあ
り主ハ〜ゝく〜ゝ
ゝ葵のゝをなるる
べ〜とゝ〇ぜ源ガ

なるとゝるゝ。夫婦のうとき中ハフツガフナたるゝ。ぶたるゝ。ぶたるゝ。ぶ

の上のるをもてたるなれて物げせ〜源氏ふんをもえあらたをもてアラ〜お渋り多のもとしとの主え○面のげハの函ぶを梅よたとへて、ふんハ梅のかよとめ多そきつれども何のんの多ふ渋りて面新の主そ〜ぞと之○よのまの風ゆ引ふ之細よ外すぐき物きてそえる梅花夜の月風のうしろめ主よ」けあの主え、梅花を桜花よいひあへて、ぶよ源〜んをかけ〜主をいへ○さだ〜ぶ」人よ彼を上紀をいひさるとぶる年紀を

るさ海をも。えあらハ〜主て侍らぶをなりま〜をなん。コレホドあだりゆるまて。お〜一ト通リナラヌなべ〜ぬんざしの源どを侍らん〜ぶ主らば。いのようれ〜う。などありなこのよ。侍らんの中へ◎◎◎◎ちひさく〜ひき延て。

源

面のげハ多をもえるれぶ」山桜んのぶぎりとあて〜ぶ〜ぶ。よのまれ風もうしろめ主いいなん。然ルベキ

恥ラヒ

ぶ侍て。などハさるものて。だぐ主のるう。ナニトナク

つ〜みめ〜るさ海も。さぶ尼夫をさて侍へ主るぶ侍めどもるはめ。

文ようくしき

もあやよこのまの〜うる。あるの尼夫キノドクナ〜ふらいぶ主や。い

ぶぐきと主へんとおぶ〜ぶらふゆ〜てのれ侍へ。もう尼夫文の源へとふ

なぶざりまふもおりひめ〜なきれ〜をふりを〜へさ

せあ〜へ〜るまよ。きと主ぶさせんう主ぶ〜なん。侍上いまさ

まふぶ主〜ぶをだよ。やや〜一字つまるふ紙へとのまへ

ふぶをだよ。えるの〜ぶ〜うつぶけ主ぶらざめれバ。

のひる〜なん。サテマアん家へつけてみるべ

尼

あら〜ふ〜をの〜の桜ちらぬまをんとあける

源

ぶどのハのるさいとぶ〜ふいいいいいろめ〜うとあり」四小段の

第三節へ。源よう侍侵して。俗都并よ尼夫へ侍文つのえ

〜ぶ〜ぶ。尼夫の文と源文ある海るう。

尼夫の文と源文

俗物の侍へりも知るぶ〜海るれバ。くちを〜〜て。

二三日ありて。怪再度侍侵ま

めれと〜いへ人あ屋〜。たづ〜てくを〜〜ふ

ちせの約へ侍相

めくる」俗ニ気ノユルセヌ事ヲいふ」上のよのつねの風もうしろめたくとあるは恋をせり、源のかの新くさぐさのたまきをいへり

四小ノ弟四節

さかりからぬくまなき」源の好色のかのかくれきくまもかくるをいふ○くいしくもほのぼのふさ」源の歌よのつふさ」源の歌○あはるくこのはありき」源の平生のさまく○つきぐしく」方便ヘ尤ラレウヘ○いとをりなき」メツソウナヘ源上をきなけれバかやうの源のかんをけをメ

らくるどの孫ひきらん。さかん。みくらぬくまなきはんあれ。さぐこのりいそけるぞなるまーけいひを。ロクニ見ネドモ

ずるるらねどもこーほどを思ひやるかをこーいどをとかう源ふをあるを俗彩もこーこまりきこをのふ少

納てよせうそこ考てあひありくふくーくおもほーのはふさ」源。おほるこのはありまなどのるとばお

ほるる人まで。つまぐ考いひはぐくれどいとこうな少納ヘ

きはほどを。いのよおぼまそのとゆくしうるん俗のアラシ

俗彩も俗もおぼーけるはふみまもいとねんごろよあんぬ

ひて。あのはをるちがきなんちるほうるくまほーき文の有宋の二はぐかきうるるなたを

とて。あるよりの中よりひさくはひてとあり中のの文ヘ

○あさくの山の山の」古今序ヘ浅香山新ヘ

ゆる山のあさくハくをあらくるくし」

とあり上をなるもづをだよとあるもよ

ようて古今序を思ひよせたるヘ、あけをるれハ新さへ

ゆるの新の方よよせたりまハ源を思

を浅くハるくあを

など縣離れてもそ

るーるふぞとくく○くし

みそめての道くしや

しくぞ汲をあそける

浅けれバ袖のこめる

る山の井のあ」とある

をとりて下の句を

あさくの山あさくも人を思そめぬなど山のあれあ源

けそるるらん。源ほのくく。

尼

くみそめてくくやーときくーー山のあれあきな

ぶらやあげをうとそべきこれ。性光おれーとを少

。少納云同 尼文の歌

ゆるのるづらひめふとよるくいこのごろそぐー

。尼文の大按察大納言の家

て京の歌よるうるのひてなんきこをさそべきと

あるをんゆとるるおもほる」四小段の弟四節ヘ性光

叙せり。是迄を四小段落とハ。此段草上のこをを叙せるる

よ葵上のこをを取り出たるハ。葵の巻のこををいろくくうちとけ

るハぬよようくぽ源ほまるくく源上を一向よおもひのふ

歌をきくせんとなるべーいとるくくみるる事つのひるり。

ツウウナヘくくいふ

○あさくの山の」古今序ヘ浅香山新ヘ

ゆる山のあさくハくをあらくるくし」

とあり上をなるもづをだよとあるもよ

ようて古今序を思ひよせたるヘ、あけをるれハ新さへ

ゆるの新の方よよせたりまハ源を思

を浅くハるくあを

など縣離れてもそ

るーるふぞとくく○くし

みそめての道くしや

しくぞ汲をあそける

浅けれバ袖のこめる

る山の井のあ」とある

をとりて下の句を

命を卑下志うらん、新
をうんもべきハ人を遣ず
たゝ〳〵と、

五小ノ才一節

公ハあくがれまとひて」源ハ人ハおちつのぬ
こ〇いづ〳〵いるゝ〳〵」
他のはうぐ〳〵〇王
命婦ハ右壺の女ゝ王
氏の命婦ハ先より
さきよりハ右壺ハ源ハ蜜
通のことあり〳〵ハ氏王
命婦一人ハ知てあるき
まゝ、されど源ハ壺
と蜜通のことハまくよ
ばてあらハしたり〇
いのゞたゞまりけん」
此一句まて王命婦ハ
什ひまて右壺ハ遣
まゝるさまをとめた

三四月のうるゝ
右壺のうへや。ほとゝぎす
相壺帝
うへのおぼつかなるゝ
源ハオキノドクニ
ハいといとゝ
りぶるとんもあくがれまどひて。いづくにも
まうでぬ。内裏ハ里まて。ひるハつゝ
とながめくらして。くれバ王命婦ハうゝやうぬをせめ
ありきのふ。源ハアルマジキコトニ
みてまつるほどさへ。つゝとはおぼえ
きゝや。右ハ
よ。世とともの内物思ひ

三月のうるゝ
右壺のうへや。ほとゝぎす
相壺帝
うへのおぼつかなるゝ
源ハオキノドクニ
ハいといとゝ
りぶるとんもあくがれまどひて。いづくにも
まうでぬ。内裏ハ里まて。ひるハつゝ
とながめくらして。くれバ王命婦ハうゝやうぬをせめ
ありきのふ。源ハアルマジキコトニ
みてまつるほどさへ。つゝとはおぼえ
きゝや。右ハ
よ。世とともの内物思ひ

り〇世とともの内物
思ひする紙」先既に所
懐姫なるゝあるゝを
みづから知のふかの物
うゝ思ひのふさまゝ
懐姫のゝをもの
以伏案〇なのめ
なるゝとだよ」
めハ十分なるぬゝ、源
ハ右のよろ所ハ物思ひ
ふをうんて思ひまれ
バ今ハぶゝかぶんあ
れのゝそれを殺よ
してやまんとゝ〇あ
さまゝうかゝるゝ」
なるらゝあきれなる
とのまゝ〇うゝて
まゝの高ハ合せと
いふとあれバ合ゝ遣
をかけて、まハ右を

ん。とふ。ふうう。おぼゝたるゝ。いとゝ。今源ハ遣を
るゝ。先ハ懐姫の伏案
ハ先ハ右なるのゝ。なつのゝうらうたげよざりと
てうちとけぬ。ふうう。たゞのゝ。
なゝどの。なほ人ハ似させのゝぬを。ほんなどあるのめなる
とだようちまゝ見ハざりけん。とうらうさへぞお
ぼさるゝ。源ハなゝどをこのはゝ遣つゝ。ゝんくらふの
山よやどりもとらまほゝ。夜の早く明を恨ゝ
こうの歌まゝて。あさほゝう中ゝるを。
源
うゝてもまゝ
まぎるゝあんの名とゝ。ものれ。むせのへらせのふさほ

三てゝものひちくて義のやうなるよさてゝ義のやうなる道理をらいとうるけれバいつそ義の中よ高名ハ消失せぬきとゝ○世ごゝろよの意さめぬ義とハ消失ぬ義を云ゝ主ハ源の御をうみて義のうちよまぎれてなきゝ分とゝなりてハかやうのこゝハ人の云伝ふべきぞとゝ○きゝの源らんじられぬよ」例の通り義ハ源の女を源らんぜぬ由を、王命婦などゝやうにうゝ○おもひなれて」思ひよりて愚痴よりたるゝ

ハ。さてもぞよいとゝ（キツウカハユラシケレバゝ）げれだ。

世ごゝろよ人やつゝん」ゝぐひちくうきゝ分を

さめぬ義よなりてゝ。おもほゝうゝれたるさまも。

いとゝとりよゝ（義の心を源ハ思ひやりて王命婦などゝ）ゝぐけるゝ

へ退出。源ハ坊のひて（王命婦などゝ）おゝゝなるさまなり。命婦乃ゝ（女房ゝ王命婦ハ）ぞ。源ハ思ひ（源ハ世間ゝ）なるゝ。

おきあつめてきたる。とのよおゝゝて。（二条院へ帰りてゝ）なきぬよ（注ぎゝ寝ゝ）

ふゝくらゝ給ひつ。（源ハ帰りのゝ）ふゝなるゝきんの源らん（義ハ俗の通りゝ分ぬと）

いまぬゝのゝあれぞ。つねのゝとるぞゝもつらう（王命婦などゝ）

いゝくゝゝおりゝ。ほれゝゝ。（内裏）ゝゝもまゝらで。（ゝゝゝみ）二三

日ゝりおそきれバ。（源を）いのゝるゝよゝと（帝の）源ハう

五小段の才一節ゝ。義ハ（義ハ悩ゝて三条の宮）

ごのせのふべゝのゝる。（源ハ恐縮ゝ）おゝゝうのゝ。おもほを

ふゝ。（義ゝ）やもなほいとゝゝろうきゝ分ゝりゝゝと。おぼ

しゝげくゝよ。ゝやまゝゝさゝもまゝりのひて。（内裏より）とくゝま

（義ゝ赤をめぐゝ）みりのふべきゝ源つのひ赤きれど。（義ゝ）おもほゝゝもた

たゝ。ゝゝとゝよ源ゝ（義の）ゝち赤ゝのやうゝもおゝゝ

まさぬハいのゝるゝと人赤れぞおぼゝとゝもあ

りゝれぞゝろうゝいのゝるゝん。とのゝおぼゝうだ

る。あゝ（病悩ゝ）きほどハいとゝおゝゝもあゝりのゝゝゝ。ゝゝき

よゝりのゝへバいとゝゝゝるきほどゝて。ゝゝゝて

まつりとゝぞむゝるよ。あゝゝ（源ハの若葉の緑をゝ）紀源ゝゝゝせの

源と密通のことを知らぬ。懐妊を帝へ申上のゐぬを驚きあやしむ〳〵。○ひこのけんひとの子よ」若宮の御ん子を懐妊しるゝと思ふ〳〵。○御ゆどのなどよる」源湯殿などよつのうまつりたもも親〳〵召使ふる、女房なり。○御めのとこれ弁」乳母の王命婦の子の弁命婦〳〵弁命婦一人なりと云説もあれど、細流及小櫛よ弁と命婦と二人なりとあるよろし。○命婦ハあさまし〳〵と思ふ」王命婦ハ源と密通のゐをうる

何どんう〳〵。人ハ思ひよらぬことなれど。この月までそうせさせを給ハざりけることとおどろき笑ゆ。若宮御ころ ひとりまゐ給ふ。おぼしくとも ありなり。御ゆどのなどよる給ふ。つのうまつりて。御るの御寵色をも給ふ。こをり給れる。御めのとこれ弁命婦などぞあやしと思へど。ことよいひあそべきよあらねど。なほのぶれおこうりける御はくせをぞ。命婦ハあさまし〳〵と思ふ」五小段の第二節。内裡ハうちよ。はゝものの平のけれまぎれ。ことよけしきるうおそ〳〵

て知るゆゑよあるまし〳〵と思ふ〳〵。

五小段第三節

うちよハ云〳〵」内裡へハ若のゐをは御のけまてありしおそ速よ平愈しのゐる状よ奏上ちうと切より云〳〵。○さ御ことゐる若」皇子の生れのふべき瑞若〳〵。○御ゆびゐう云〳〵」源の天子の父たるべきと云若〳〵。○そのゐのよ〳〵のひめありて」新釈よ上をおのてを罪よあるべきゐるのんゐつらんを云〳〵とあるまろし河海よ左遷のゐとあるハいのぐと若ゐるまを云へ

ましるゐやうまそそうしたんのうこれ人〳〵きのこおもひけり。帝いとゞ哀ようぎりなうおぼされて。御つのひなどのひまなきを御そらおそろしう思ふ。のみ御御をと懐妊。中宮の御ゐ御どろ〳〵きうさ御ことゐる若をこのひ〳〵。若を占ふ者あそゐるものをあつてとをせのへバ。御ひうう笑〳〵。のけぬそぢのことをあつせ。そのゐのよ〳〵ぐひめありて。つ〳〵ませのふべきことれん御といふ。源んまづ〳〵〳〵。源河笑正〳〵。源河いうらのゆめはあらぶ。人の御ことをこのゐるなり。げゆめあふまで。まこひとよまふ。人ニイフナと占聖ゆめふまるる

り○りしさるやうもの上の義をあいせたる古者の上言のめくるもやと思ひしめるこの○とのおもをつくし」今一たび義壺よ逢のみまほしとこの○命婦も思ふ別をまるまとこの○そのるきひとくぶりの内ぬりの」をよハ義より一すしたる使くのゆめるのありしのど、今ハたえてく一言の内いらへもなくと、

五小ノ第四節

七月よりてぞ七月よりて義入内しふこ懐姓後四月こ○いとぐしきはおもひ

とのゝひてぐらのうちまは。いのるることならん。

とおぼしまどふ。義壺に懐姓のこと

さるやうもやと。アラシ おぼしあせるのよいとぐ考く

甚タ切ナルこ

いとしきことの堂をはくしきこえまへど。王命婦

ぬも思ふよ。いとむくつけうとづふしさまうて。オソロシク

さらよりだこの思ヒ慕ル方便モナシトこ

るべきこと。たのるきひとく

ぶりの内ぬりのゆさのなりしもたえてよりて

五小段の第三節こ。源義のことよつきて痛んしのふこ。

さて義を令せのひて。まいとおどろきのふさまるり。

えづき

七月よりてぞまるりのひけるめづらしうあ

きれてぐしきはおもひのほどのぎりもし。

義懐姓のさまこ

ふらるなりのひてぐちなやこおも

やせのこるさげよるものなくめでたしのこ

モマタ

あけくれ 帝の義壺の方こ

物言こるこよのこおハしまして。管絃ナドしるふこ

やうをつきさこるれば。源氏の義ないとまなくめ

しまいたつぐ。琴 笛 ことふこなどさ内ぐよつのうまつ

らせのふぐいとぐうつくしこのこどもこのびのこきけ

きのもり出るをりく。義こ

をおぼしおぼしつづけりし。五小段の第四節こ。義壺

内ハ恨おもこうて。内裏ノ

なりのこ和こ。ぬふハ五小段義こ。廿一段ハ長べて義壺の

上のことを叙せり。さて是まで義と源と密通のこと

とハ。のくしてをこてよ

りて始めてなりたるこ。このやまでらの人ハ。

尼天

山寺

の内ど」帝見ごろ義を

行のこるゆゑよりの

さも限りるくこ見こ

○げよるものるく

めでたし」帝の内見

ひうぎりるきもげ

ものさこ○内あ

そびもやうく」秋よ

りて源しきはか

なれでこ○いとぐ

うつくみのこど源ハ

義のことを深くかく

しのこどをりくはけ

きよるもくこ○

おももさまこのこ」義も

考のをのこ源のこと

を思ひしつづけて心

うく思ひのこと、

六小ノ第一節

このやまでらの人

ハ禁上の尼天ハ病気
全快して六条京極の
里より出のまうゝ〇お
れ〻さはよのゝ」尼
天禁上ハまゝとけな
きとの所をうして領
掌しるハぬゝ〇あ
ゝしまさるもの思
ひ」為妻のことを思ひ
ゝづゝひのふゝ〇月
のをうゝき歌」花名
云、時鳥びしるれ雅と
もゝ〻ゝ六条京極の
あゝうるべしおを
ものうをいゝるゝや、
如ぞつのをゝしあり
所身所のもとなるべし
〇あれたる家の」尼
天の里ゝ六条京極
の道ゝあるゝ〇如

よろしうるりていでのひよりゝ京の内六条京極の邸ゝ
たづねて。源氏ゝきゝの所せうそこなどあり。如れ
さはよのゝあるもことうなるうちよ。時七月ゝ
ハ。ありしよまさるもの思ひよとゝ異事ゝるゝて
きゝゆく。秋九月ゝの末つゝ。源ゝいとものゝろばそく
てなげきゝふ。月のをゝき歌。おのびたるふ
よのらうじて思ひ立ゝるを。しぐれめして
うちそゝぐ。おそをるふハ六條京極ゝうよ
て。内裏ゝよりなれど。ゝゝ殿遠ゝきゝんちをる
よあれたる家のゝぐちいとものふりて。木間
ゝぐら

按寛大納云」惟光源
氏よりゝる如ゝ大納
云ハ尼天の夫ゝ禁上
の外祖父ゝ〇とふら
ふべうりけるをなど
のさなんとも云」源
かゝとゝりせいとゝ
よ訪ふべきものを伺
とそそのをを知ちせ
ぎりしゝ〇人いれ
てあるれせされ」惟光
使者を以てゆ入るゝ
〇引ぞとかゝ云」
序ならでゝぞと源
おとふうひのふさま
よゆ入るゝ〇いとか
さゝらいゝきとの
な」光ハ女房の如な
れどゆ如云なるべし
かゝいらいゝきと

うゝ邑たるあり。例のはとゝもよゝるれぬれうつ惟光
なん。内故按寛大納云の家ゝ伺り。一日ものゝゝ
序ゝよりよゝふらひて伺ゝるゝしばゝのはまう尼上へいゝ
うよゝりのひよゝうれば。なゝどゝも如ぞ色びどゝるん
ゆて伺りしゝと哀ゆれば。源内あれのゝゝやゝふゝふ
べうりけるを。るゝどのさなんとゝものせざりし。い
りてせうそこせゝるとのゝへバ。いまてあるんせ
弱
さゝ。ゝぞとうゝたちよりのゝへることゝ。いゝせ
あれバ。いりてゝゝ所ゝとゝふらひよゝるん如ゝて
ゝしたるゝといゝふゝ。如ゝ。尼の内の人ゝゝ女房如ゝ。ゝゝらい

あれハ、俗ニシヤウシノコトヂヤナアとゝ云ふ。○みるゝのひさゝ」古の家作ハ凡て南向ニ造る故ニ、南ハ北にて或ハ南の何くとある時ハ、正殿のことゝ、こゝも正殿の廂を取かゝつげ掃除して源を入るゝ、

六小ノ才二節

いとむづかしげよ侍れど。甚見苦しきふるれど、源の内侍の内侍をやまでよいれまるものを。○ゆくりなう物ふるのきゝ」ゆくりなうハ不意ニ云ふ。うちつけニ奥の方へ入れまるゝハ名人なるものを

たきことのれ。その日ごろむげ（向ケ）よいとしうのもげるゝならせのひよたれだけゝんめんなどもあるまじといへども。源をゝ」ありてみるゝれひゝ」ひきつくろひていきたゝ」とそ。みるゝれひゝ」ひきつくろひていきたてまつる。六小段の才一節ニ。源六條京極ニ尼夫のもとを訪ひまつる。尼夫のもとを訪ひまつる。

いとむづかしげよ侍れど。こゝまりをぞよとてゝるん。ゆくりなうものふるのきゝ」ありよるん。

とゆ。げよこのゝるハ也（側）ゆよたゞひておぼゆる。源朔常ニ訪ひまつる（せんと思ヘドモ）つねよりひめへゝちまるぞゝ。このひなきさはよのゝゝもそなせのふよつく（恥入ヘ）まれ侍てなん。尼のな

ゝ、賓客ハ表の上段の間ニ迎へまるべきを、奥ニ迎へ入ゝ下ニ通ゝ」ゆよたゞひて却ぼさる」とあるを思ふべし。○らぐりゝちハ云ゝ」尼夫より人侍まて陸奥ゝ、さハ内病九のほど全ハ却つのゝ○ゝ」ゆのらゆ色させぬゝ」ゆ向いとうゝ」ちどいゝて恥をゝへてみるべし。○いゝゝゝんぼそげよ云ゝ」尼夫の幼少なれバ行末のほどおぼつかなくそれのゝゝゝまゝり、後生ハさふりまるなるべきとゝ、

やませ侍ふゝとゝをも。かくとゝもうけゝ」ゆいらざりける。却ぼつ（心祝ナリ）のなさまるどゆ色めふゝ。尼夫より源尼夫の姿を不知ありしゝ」ゆ尼夫より源をゝ」ゆいつゝもなくのゝまゝべる。このぎるゝのさはよなり侍りていとうゝけなくたちよゝせのゝゝるよゝ。ゝゝゝのらゆ色させぬゝとのゝゝ。源の思ふのゝるゝゝ」ゆまゝるゝとのまそぢ。たゞさゝよもおぼゝめゝあゝらぬやう侍らば。源の幼年を云ふ（アルマシキ齢）このぎりなきよゝひまぎ侍りて。ゝるゝ源成人せば必召しまへゝ」ゆ（まへゝ）させゝまへ。いゝゝんぼそげよゝのゝおくゝもんねぶひ侍るゝちのほゝゝまゝ」ゆすゝられぬべきまるゝゆ色めゝり。

六小段の才二節ニ。友按察郎のさまを叙せり。

六ノ才三節

いとちのけれだこそ〜ろばそげなるけしきえんぐ
ゆゑ〜。いとこ尼夫の詞アレトリ
ぐよう〜こそまりもゆゑ〜ひつべきほどなる〜ま〜あ
ばとのふ。あそれ添ふ
ひとへんとゆゑこうはきぐ〜きさゆをみ〜たて
まつらん。いのるる奚うの。はきを
より。表よ見ひきこゆるもあや不審きさで。世のこと
まは。あの世ようの国編ここそこと おばえ侍らぬ などのひて。又添の詞ニアリ 時代ここそハのひな
きこえ侍を。このいとけはきの声
いのでう。とのへば。ガ物ま詞キカン いでやよろげ。あの詞

○いでやよろげ〜」いでや俗イヤモウ〜はこ
ハ何ごとも知らでは寝
なるこ〜と侍ていふ〜
○う〜〜そ」上こそ〜尼
夫をきこ〜ていふ〜はこ
をきこる〜て何いかな
きさまこ〜氏句ふる〜
すどいふ頭を添てえ
るべ〜○〜いとこの〜
いらい〜〜」さきこよ少
納云の源へはこハ侍
寝うる〜〜といひ俗
のあらふるれぞこ〜○
いさ」不知こ俗イヤ〜
といふこ〜○げよいふ
このひちのけこひや云」
はこふるほどいとけ
さきこまるれどよく
教へたこ〜こたきこ〜

らぬさ侍よおぼとのごもりいてるど少ゆるを。
り志も あるこ〜より彼方くるおとこ〜でうへこそこの寺よ彼山寺こ見玉へ
あこ〜げんじの夫こそおこ〜たるれなどこ語を
ぬ。とのふを。女房こいとこ〜キノドクこ〜と思ひて。あ
ヤカマシるこ〜ときこゆ。はこ尼夫の山寺こてのひ頭をいふこいさこ〜あばんちのあ〜さなぐ
さめきことのひ〜あばぞこの。とこ〜こきこと思こ
ゆを。こ〜。とおぼしてのふ。添ひとをこ〜ときこ〜のへ
ど。女房こ〜ぐこ〜と思ひこれぞ。はこのいとこきこ〜ぬやこ〜こそ。
信実こる尼夫への西こ奉の頭斗をこ〜ひをきこえおきこのひて。
まめやこのなる侍こ〜こ〜
このへりのひぬ」。げよいふこのひこのけこひや。さり

六小ノ第四節

いそけるきの音」は、の声を聞くに、川の声、また人、塔のよせるて、高き所を芦まで泥むとのふ、之は幼なき離鶴のあいらしき声を聞てより芦まで行やられぬ源の舟ぎき一通りなるぬと。○

初れど人まや」引おく古今よほりにてぐたなるし小舟漕のこりおれど人まや意とうりなるんとあるを引けり、さはいふのひなく幼き人と思へど猶その人の意しとと。○少納言ぞ聞えたる」源の作なるを少納言よりもなる。○

尼天病中の状。第二女房建紫上北方状を叙ス。

次の日も

内侍を以て訪ひのふ

いとはなやかなるひきつくろひ、もののちひさくて。

上ハ中ノ方ちひさくてひとびてとあり故ノ伝のとい

いとけなきあがのひとりゐ給へるまゝ

一下西ノ方ニ居シキトノ

まるづむあぞえるるぬ。初れど人まや。とさらをさるくかきるしのへるも。いとうをのしげな

源ノ意跡ノ

女房

れど。やそて作るほんよと人ゐ給てぞ聞えたる。

少納言文の用ハ尋の尼天ノ

とさせめへるはるふ物もまそぐしごげるさはあるそ。山てらよりまのりまるる私まて。かうとさせめへるこのしさりはこの世なるでもきこ

六小段の第三節

尼天病中の状を叙ス。

源ノ意

とも いとようをしへてん。とおぼせ。

六小段の第三節

いとはなやかなるひきつくろひ、もののちひさくて。

いとけなきあがのひとりゐ給へるまゝ

まるづむあぞえるるぬ。初れど人まや。とさらをさるくかきるしのへるも。いとうをのしげな

れど。やそて作るほんよと人ゐ給てぞ聞えたる。

とさせめへるはるふ物もまそぐしごげるさはあるそ。山てらよりまのりまるる私まて。かうとさせめへるこのしさりはこの世なるでもきこ

この世なるでも」は、えんまひの辱きハ未来までも忘れまじければあの世よりもや結ばんと尼天の作なるを。○きこえ

少納言いとうをのしへて。

んそちなるき」二小段第四節ハ尼天初ひたくんありおれもちぬるをまをおくらるる者をきえんそちなるき」とよみ一時のことなるど思出るふ。○てよつ

てのあ」ハ第上をさるく、ハ草のよせて搗といふ之、之ハいとの物よして若つぼの縁ある紫上をえんとと。旧注ハ古今の歌の一本ゆ

源氏物語講義　三十七

えそせんとあり。いと衰とおぼせ。秋の夕べきとてんのいとはなるくのこ笑し乱るる人のはあるよんをうけて。あるごちなるゆうりも見奴ま

しきんもまそ強ゆふべおぼ一いでられてこひくるまとあるし一ゆふべおぼ一いでられてこひくるま

深切ハ思ヒ入ル自然近ク又ハ自然ノ事ニテハトト思ヒ

とえ思ひとりやせんとさまそのよあやう

てよつ

ひとりる思ふ。少納言尼天ハ代りて内侍ハ尼天出来故按ハ大納言の郎ハ源

さまる。少納言尼天ハ代りて内侍ハ尼天出来故按ハ大納言の郎ハ源

小段落とハ。式段ハ尼天ハ内侍ハ六

立ちのふとと源とふらひのふ状を叙せる。式段ハ六を以て

結べと。紫の上のとと源とふとといふ。式ハ六ハ内侍ハ六を以て。

まのんをりといへり、

七小ノ才一節

朱雀院三条の朱雀よあくるほどいぶ行幸ハ紅葉賀の巻の伏案ノ○とりどりのざえども」ざえハ藝ノ各舞楽の誓古をまるノ○山ざと人」宮上のとノ○ふりえつのえ〜たりけれど」ゴざとはノをつのえ〜のひ〜ノ○ぜけんのざるま」世間の道理ノ僧都の泡ゆゑこゑりぐ〜しくかくノ○うーろめ〜ぐけ」後目ノきえ俗アンジラル、といふさノ○をさるきほどは」宮上幼年なれど尼夫

十月ハ朱雀院の行幸あるべ〜。舞人ひ人などやんごとなき家のこども。上達部。殿上人どもなども。舞楽のよつぎ〜しきは。えらせのへれば。えらぬ。大王よりえ〜めて。とりどりのざえどもをひのふりをりけるを。おぼ〜ぬ。ふりえつのえ〜たりけれバそ。都うげの返るのこあり。僧都ぬる月の世日のほどよるんつひよむるく〜みえ〜て。せんのざうつるれど。のるーひ見ひるる。るどあるをるのふよ。世界ハ尼夫をのるさも表ようるめと

を恋慕ふでありうと〜。こゝやはり西桐壺の更衣よりまれのひ時のるまで見ひ給ふ〜。たるめど」更衣のうせのひ〜。時保三才ありしかたーのるハ笑えのるハどと〜、

宗ノ才二節

いとるどはぎて」三十日の忌ノ忌明まで宮上ノ。ぬ〜ノ○時どて〜げのる」日数ノて保ゐるら訪ひのるノ上よ〜ひのへハ侍るとはよゐるのとあるまそ知られたり○きげのるは」上よりの

げよ見ノ尼夫ノ〜人ハいのるんをさるきほどよ恋やはらん。こゝやはり西よおれまつりなどるあ〜ぬど見ひいで〜。宮をは侍まて訪ふ尼夫ノあさのるはどふらひのへり」七小段の才一節ノ。源小山ノ保侍つるる〜少納ノゆゑ思ふるる〜ぬ保ノへりるど少巫たり。いノなどはぎて京の六条の按察邸ノとれまるん。ときく〜めへで。ほどへてこげうるのどのなるる我よ。おる〜たり。いとそごげよあれ六条邸のたるふの人ぎく〜なるよ。いのよをさるきノ宮上ノおるるーるらんとこゑ。きいのふよいれノそまれ。少納ノ。尼夫のゆるさまん。ありさん。などうち

深き御仏の御とあるとしるべおん○あんちゃう」
此方バうりと云さえん
○母よりこそ〜〜そまつらん」母を父兵部少
輔の方へ後〜まらんとえ○うひめぎみ」
少納言の御そ尼夫
のんをいつえ母の母
お兵アいの本妻を情
なく思ひしりとえ○
ちどなく〜ぬよそひ」
母上二三歳の時なら
バ母を別まてもあ風
べしえや十斗よなり
なくバ他人の中れ住
居もいうぐとのさえ
○考るきと」少納言ハ
継母の母もむけをえ
知りて今のなるえ○

泣
なきつくきこと迫つくるよ。あんちゃう殿の神もたぐ
なるべ。少納言の御
よりこそ〜〜そまつらんと侍るを。こひ母
めぎみのいと兵アいの方妻をえ
こと迫なりしよいと一向むげよちどなるぬよそひ
のまぐなるのシカトモ他人の中の振子をえ人の母もむけとも思ひ
なるべ。母の歳十ばかりなるを云えなるいの子だちえ
なるる中れ。ばハあとり抜ちれがあるべ〜れんとえ
母上ハ死去しなる尼なるえあるべ〜〜きく人まてやまじ
なげきつるもこと母なく侍るよかくあ芳のうきなりとなよ歎きしとえ
ちなげの母とのなふのちれ母なるえ
なるべけなきなげのチョットシタ母とのなふのちれ母なるえ

たどり少迫させべ。まろ南方いとうれ〜う思ひのくられ
ぬべきを時節ふ〜よ侍りなべ〜。ばを云えなるぞ
らひなるきこ侍ふもものの〜ふをべ。ぱ〜よ
りもとのびぐなるひなるれ。いとうるいらく列えれ
いく侍る。ときこ母。陳角なるるかくくのく〜き
こと迫ちちをるんの母どをばくみるまつらん。そ
のいふのひなきばありさ母のあそれるものう
芝えのふるもの。契母とまるん一通りなる宿縁とえいなるべ〜思ひ去
られける。特人づてなるで少迫ちちせぞや。
あ〜とのけ浦よこるあいのくくとなこたち

のちの母なるえ」源氏
のひまの母なるまでハ知
られねどまが尚かう
れ〜とえ○ばをこ〜も
なるぞらひえく」ばハ少
〜も源の夫婦ふ准て
あべくくもあらべをき
なる〜とえ○考るまこと
かうくりの〜〜云く」
侍とと〜て左程ふ言状
〜て迫迫ばるぞとえ
○そのいふのひなるき
えく」をいそけるきこ
そ系布ことなれとえ○
侍人つてなるで」源氏ふ
ふ迫ふいひちをたき
とえ○あ〜とのれ
の迫」芦のあきふ氏
をよせて和おの浦とう
けたりえるあ波な

とゝ（ゝハ皆海の縁語ゝ、主ハ底ふハ幼年ゝそを）
ゝ（ゝきほどのことハ）
くとも立よりし（ゝ）
て空ゝ（ゝ）
いとゝ（ゝ）

海ゝ（ゝ）
うきたるゝハ浮華ゝ上
の和歌浦をうけて
る波を添よゝとゝ
まゝを底ゝよせて
めり、主ハ添のをも
然ゝらてゝるゝ
浮華なるゝ〇
なぞこえざらん引歌ゝ
後撰よ人ゝ
いそげどゝも年を経て
なゝど越ざらん和歌の
関とゝをとれり、主ハい
るゝで底ゝよ主ゝのかゝ

なるゝ（ゝ）
て。より（ゝ）
らぬど。又（ゝ）
を。（ゝ）
てけり。と（ゝ）
ふゝきゝとの（ゝ）
このひゝざのう（ゝ）
りゝ。とのゝ（ゝ）
ゝは（ゝ）
なゝん（ゝ）

きとゝ、

七小ノ第三節

又おもほゝ（ゝ）
ゝもあゝ（ゝ）
人と思ひ放つべくも
らぬものゝ（ゝ）
ちとのゝ（ゝ）
ふゝきよ引底ゝ
ゝと云ゝ〇補
と云ゝいとをさゝ
さゝ〇いゝ（ゝ）
今あらためてゝ
づゝ（ゝ）
ゝ〇引ゝ
寝のゝ（ゝ）
つのゝ云ゝ引
いゝ（ゝ）
きゝ（ゝ）
とゝ〇てゝ（ゝ）

りつらん。何人いづら。やのおもゝ
ゝ。底ゝ
らぬど。又おもほ
を。底ゝ
かゝ
ゝ。底ゝ
ゝのゝ。底ゝ
ゝ。底ゝ
ゝ。底ゝ

細よ上よきぬをのいとり孫くふるもべくもあハひへくをいれて髪をさぐり孫るもべくしとあり○うて例すらぬ人の云ふ」うてハめんゐくるとイヤガルさへ例すらぬ人ハ考たーのらぬ人とへ○まるんとらふものをとて云ふ」ゆそれハ手であるとて手を引いれのふへ○つきて来べりいりて」源つゐてをさー入てへ○きこえたらせのもつとも」上よ人つてるうで少臣たらせやとのひーとうけそいふ枕へ源幼きれ源

ぐり孫へまバ。なるへ（ヤワラカ）ある時ぞよ。このみハつゆ（衣）とかりて。ちる色のふさや（髪）（フツサリ）このよさぐりつけられたる時ど。いとうしくらひやらる。て紙とらく（愛ラシキ）ふるへれバうて例（見ル）きらぬ人のかくちのづきのくるハおそろーしうて。ゆ（怖）るんといふものを。とて考ひてひきいりのよつきてきべりいりて。源尼天うせのへバいるはま（怖ヘ）今ハ系ぞ（疎）を見人ろぞおもへべき人。なうとみのひそとの孫へめ（少納）ろぞおもへべき人。なうとみのひそとの孫へめ（疎）（勿）（ヒヨンナ）（イマハシウ）（ヨ）さへ詞（イヤモウ）ゆとといでであるうてやゆーしうも侍るこれ。きこえ考らせ孫へもざらよなるの考ーも侍るじ物をとそくーげ（メイワク）見ひられバさりとも考る時

七小段の才三節

源氏物語講義　五の巻　十五号十

此のの孫へ同じをいのぐるあらん。なは（ヤッパリ）たぐよよ考らぬんぐ
しのほどをうそそうまくとのの孫へ
を近くえ（裏）ふ枕へ。あられふりいのいてそぎきよのさ海ぎり。
いのぐ〜ゆうへ人ぎくなるんほそくてさぐーー孫ら
んとうちるひめひて。いとうそそうき孫れバみの源氏の泣へ
うーーまりぬ。ものおそろーき最のさ海なるを。と
のの人まて侍らん。内の人〜ぐちのうさふらふ色よう。そい
とうれ源ほよ。み帳のうちよかき（はつこをへ）いぐきそいりぬ
つぐ。内の女房へあや考うおもひの泣のうもとあきれてたれも
あれもみうり。少納へはらーしろめうろうもし

七少納言四節

いとうそそうきれ孫れた」源はさびーきさるをうそ孫て侍りぐきこえ○みうりしまみりぬ」源侍ようおろせとへ○とのの人まて侍らん」とのの人ハ宿直へ源みづうり今夜宿直せんとへ○うーーろめとうろうもー」先づかくーーうるはるーーきこえと思へ○あらまーうゆ色さうぐ」ありーーいひさて

ぐとも申すべし。みづから○引ろ戸に行海に男女共に戸を戸と号せり。年ごろのきゆるなり○そぐろさむげは「何と申すべきげまし」俗身の毛だつなどいふなり○ひとへだのうをおほく、みて」肌の衣一重なるよつみそな○うちておぼえるなり「どあく」ものらぬなりとは思られぬなり「どな○いぎなり」添ふなり「添ふを二条院、源一まちんと思ふに、なほ更なるあく、ひとりあれとさそひなりな○分よつくべきと」思のなかなるふべきなりとのなり

と申もつどぬ。あらまほしう当座さらぬべきならねば。うちなげきつゝ。思の天ハいと申そろしう。いのるなりんとて戦慄おれて。ひとりゐくきはたぬ肌ぐ。つきなも。そぐろさむげに申ばしるる。ほんなるらたくおぼえて。ひとへだのうをおほくみて。ほんぢはんちもの川ハうそて申ばる当なるべどの。表ようちのことらひなひて。源氏いざのなくよをのいいさるなるど申ほくひ。雑遊あそびなどさるふよ。とんよつくべきことをの給へけそひのいとなつのき神。をさるきこちるもいといとうも申ぢぐ。さなぎよむつかしう祈寝

へ○みどろぎ」身動へ、ぬ分て眠りのなぬさまへ○げよかろ云」上に源のとのなるなて侍らんとのなるをげまと云へ源の泊りのなぐハいのよさびしのうんとへ○よろしき福に申ばし」思のお急の年になるぞよろうまし」とくくさまやきいつへ、

七小ノ段五節

うちろめさまよ」元きくしさまへ○風をこし云」上の思ふへ○しとありぬほ」なるのなきのやうなる人の思りんとへ○なるぬめハ」生和のなるぬめハなる

入ラデ。もいらぬ。みどろぎふしのなり。夜ひとよ風ふきあるいよ。げよかろ申ほのせざしなりしのばづのよろろぼそのらまし。おぼしくいよろしき福に申ばしるまさ

語ルヘ。ひとくめきあへり　七小段の第四節へ。源氏上を拾て伺帳の内に入て慰めなふ狀へ。を思を二条院へ近取なる伏業へ。ふふ霧ありあれて云へとかき申して。夜一夜風ふきあるに。とまよつるハ思へ。さて上に尼天九月の廿日のほど出なるなれば。今ハ十月の少納言◎◎◎◎◎◎◎。廿日過へ。ほの傍近へ霧降る当なるべ。めれとハうちろめさなる。いとちのうさふら海風ふきいいふきやいたるよ。歌ふのういでなるもとありぬほなりやいと表まみそまつる用ほの侍あるを。今ハまして。なる時のま

とて○かくてのこゝはいのごとこのやうのさびしきふるまひはかつ上いのぐきこみめのうんとて○おもほしたるものゝ上父君よりは近まゐるべしと○閏四十九月尼天の四十九日ゝ十一月九日のはるゝ日過てはを迎取ちんとて○たのもしきさまぞ多かるも云こゝ父君のほ河殿なるしきことなれど他所なれバうとくしくのちんとて○おもほしたることそゝ上はの住ゐのふんハ源のゝ中ゝ父君のゝ内ゝとなるべしと

もおほつかのなるべし。あげくれなどめたくへる不
はをよりくしてまつらんかくてのこゝはいのいのもの如
のさびしきみても物怖ぢぬとて
ぢくしなどぞうけりとのゝへぐ。少納
ゆ迎めふめれどこれ四十九日なくなぬの
めるふるときこゆれバ。源宿たのもしきさまぞ多かるも。化所
まそならひめくるハ。おもほしたるこゝとう笑迎ぬ
いめ。いまはをえまれどまつりこゝてまつれど。あきのらぬんざしハ
父君なる侍りぬべくくなんとて。はを撫給て つくこのくりこのぢち
まさりぬべくくなんとて。
まそおめひぬ　七小段の第五節。源少納こゝと第上のこゝを奏り玉てまのり出のふさこゝ。
ぬ　雲ナドノ截リ隔ル
いくくしぐきりこゝれる雲も たぐなるらぬよ。雲ハ

七小ノ第六節

いみじうきるこゝれる雲の曉のさまこゝ
○まこゝとのけきこゝ迎
まのきぬくすぐて
源ふさびくけれバ妹
の門は立ちのこゝ
○あさぼらけの霧き
りたつ雲のまひと
いつよりを迷ふを兼
たり、妹の門ハ僧馬樂
の姉ぞ門や、せるの門
ゆきこのねてやあの
のバ、ひちはこの雨すや
ふらちんくでたはさ
こゝとをを取れりさ
てこい旁のまひよ
もまよこゝぬ姉の門を
たぐりまぎこうく
見こゝ○ちこゝ

いとこゝろうおきて。まこのきぬくこゝバ
ぬべきこゝ。源ハ林くこゝ
ひのふふの。ちちこゝりこゝを知ばいで。妹門
ちたくこのせめくどきつくる人こゝ。ひこゝて
源の従者の声きくこゝのおをこゝませのこゝ
はこゝもよこゝある人こゝこゝ。
源の
あさぼらけきこゝ川そこのまひもゆき
まぎぐこゝきいもおあどこれ。二四とふこうこゝ
たこゝよ。由アリゲナル
妹の
あちどこゝ下みたるこゝ使ぼあひをおこて。
のとぐこゝよさこゝこゝ一八助字こゝもぜぐ。四入こゝいひこゝていりぬ。

りの家」上よりきりたる
家とあるをうけてき
りのまがきといへる、
立ハそれほどるうく
ハ立よりのへ、その戸
さしたれば立よりも
せとこそ○このる
ものさけをけれど」再
なく人も出こもバ海る
も情なく思ひのへど
海そそのまくよゆり
のへること、

八小ノ牛一節

紙とりるこ」源忠知
のふことありて独笑こ
○かくべきこのそも
ぞ」左の侍所の女な
らねどかくべきこの
ものなくて思事して
面をつのくるこ上

まる人ハいでこぬバ。つくるもなさけなけれど。あけ
ゆく空もたこ不都合こたなくて。とのへおそ二条院こ
海海さの道まで或妹の門よ立よりのふ。ぬ才六節こ七小段の
小阪殿とハ。さて此妹ゞ門のふ。塗ともなくこるぞとお
ぼめのしてかきたるいとをこの。此阪ハ上よ坐上のうこの
よ知くだ〳〵しうかきたれば。宗服波よりうるぞとおぼめ
うしたる一節を以て法ぐるこ。これ文法の頓挫こ。作者の
海くこうへ。くめでたこ。こるこ。味こひてさこるぞ。坐上の餘波
をこの。かりつるこのなどりこひ〳〵。紙とりるこ
こ。つ〳〵こ。日タケテ起出こ日ものごもりおき
て。ふこやりのふよ。かくべきこのこも坐ぬこる
ぬ。此のうこへ侍女を呼こ呼集して居のこる
ぞ。ふでうちおきつ。こそこひぬのへ。をこの。い〳〵きる
ないどをいやりのふ。按察郎こ今日父書所ありこ
こ。こ。こ。

たるに衣を着のみ
[illegible]
の品々〇[illegible]
もあつ〳〵尼天八年
に病気して〇[illegible]
の一こゝろうりて」
父宮時〳〵八条の
[illegible]
といひ〳〵をと〇あ
や〳〵うとみて尼天
のうとみのみより
て宮も継母をうとむ
え〇なほのハんぼそ
くとも」宮て上もを
さるきほどよんぼそ
くとも[illegible]づ今のほど
ハこゝよかゝて[illegible]
らんと〇[illegible]
のんを」宮今ちとん
も付てのちよとゝり

ぞはいとなゝて。ところ〳〵ぐ〳〵げよ却ばいとり。父宮
しごろもあり来く。さぞ過ぎのくる人よそひのくる尼天
より。時ぐこゝよりて。後母まゝ子紛ゝと思ひ
ものせ〳〵をあや〳〵うとみ強ひて。[illegible]
といひ〳〵をと〇あ
や〳〵うとみて尼天
のうとみのみより
て宮も継母をうとむ
え〇なほのハんぼそ
くとも」宮て上もを
さるきほどよんぼそ
くとも[illegible]づ今のほど
ハこゝよかゝて[illegible]
らんと〇[illegible]
のんを」宮今ちとん
も付てのちよとゝり

瘦やせのゝれど。いとあ[illegible]愛ラシクゝ
ふ。父宮ハ
とゝはるる。おのれ
て。日暮
泣
泣
[illegible]
[illegible]
[illegible]

身の上のをさなき
さまを〇をさなきに
ゆちられど上の
陸奥性のさまを志め
し〇ひるはさてゐ
尼夫をこひのみ
るの浦どいとのくま
ぎらいてなぐさ
めのみとし〇かくて
いとのでなぐーのん
少納言のんぬはやや
うまそいとのーて
月日をなぐーのん
とやぐさあぐみて
とるよ泣さまん、

八小ノ段三節

まゐりくべきを」源
はの方へまゐるべき
を、弟より召のくへば
系らぬとのみまゐり

尼夫（ものの）
まうでんなぐーまらひて。今はなきくとなりのひ
よけるとおぼしそのいとーきよ。をさなきまれんち
なれど。おぬはとふとこぶりて。れれのやうにもあそ
びのみ。ひるはさてくもまぎらいーのみをゆぐれと
なれど。いとーのくぐかくてはいのであ
なぐーなんとなぐさめびてめのとも泣
きあくり

八小段の先二節と尼夫をきくひて
泣まゐ少納言殿のこのくひまゐきの状。源
氏の物とよりハ。怪光を見てまつれのくり。ま
り侍みて清息の殿。内裏
ゐりくべきをうちよりめーあれをなんぐーく
のふさまを
うみしてまつりくも。きづかはしう。内番の殿
のくとのぬく

○左大将殿
はの方へ
つとの殿
ふれまゐ
のとの
まゐりて
ちまゐ
まゐれ」拝櫻くゐまゐり叱
られんとく〇いとげ
なくこく」をさなくい
ひーのみるとく〇
それをぶ」今少納言の
いふとを聞くく〇あり
りくてのちやこく」月
日をくて侍大宿縁
遁れのふぶ源のく
くはふの手りのふとも
あらんとく〇あや
うおぼーののはる

たてまつれのくり。あちきなくもあるれたを
ふれまくもものくいくーめよこのほとよ。なきこと
しーつけば。はよ付法女房達
さんなまれん。あるのこ。ものくつれでよいそげ
なくうちいで少臣させあまくなどいふも。そ
れをぶなくもおぼーくぬぞあさはきや。
お物をいられうつよ衰なる物語どもしてあり
くてのちやさくべきはくせのぶれや臣のそぬ
やくもあらん。たぐいまはうけてもいとまげな
きはくくくてまつるを。あやきうおぼーの

[illegible]

[illegible]

[illegible]

をさく〜あく〜らをさび。物めひいとなむけをひなど
をさく〜あく〜らをさび。物めひいとなむけをひなど
なるけをさび。（性光ゆり来る）ぬ＝八小段の朱四節と。性光再び
方ととハ偽よ女のこゝろ移ろひのふ。（葵上の方と）ほと
とそを用をのさまをゆ巨あぐ〜ゝ。ゑハ大殿よ知ハ
しけるよ。きんの女ゑとみよもんめんゝ移を
び。（源氏）ものむづのゝく芝巨めひて。あづまををぎ
ぎをて。ひゝちよは田をゝそつゝれとゝふう
たを。ゝゑをひとゝ（アダメキテ）をなめきてをゝびみるゝ。
まゝり（性光ぞ）たれぞめゝよせて（はの方の）ありさゝとひるふ。
ゝる〜（云々）なんとゆゆれぞくちをゝう（惜）おぼし
て。（兵ア々の方へ出上ゲ）ゝのゆよりゝるゝ。ゝるゝ。ゝるゝ。
ゝるゝ。ゝるゝ。ゝるゝ。

とくちを惜しのるべけれバ。まづ家ふのう出るふ。女房
れいの志ぶ〳〵（ていねい）よんもとけどものふ。源有
せちようるべきことのたべる。ひるまへ出てなん。立
のへりまゐりきるんとて出るへバ。葵方の人も扶侍きる
ぬ志らざりりり。大夏の内まて源の内侍
たてまつる。これみつだのりをてるよのせて知〳〵
ぬ　八小段の第五節　葵上。源大夏　まゐり葵上のもと
よゐ給ひて。嘯よ云ふて出て上の方へ行るふさ海へ。
門うちたゝいようせるへバ。ゐもちぬものあけたるよ。
ほ志をやをらひきいれさせて。怪光　ほの寝殿の妻戸をな
らして志ゐぶけバ。少納言きゝて出きたり。

○こよゐ〳〵ますく。源の内のまゐり給へ。○門とのこゑりて。夕顔
ハ寝るへるとこ。○いと花ふのうゑ。上の
そ尾へ。少納言源ハ深夜よりづゝまりの内
りちらんと思ふ。○いのこよゐ〳〵きの内
いらく。幼き夕顔上ちれ
バ志のとしたの花をそ
おぼつのちゝとこ。○
いとかゝるゝいゝ。
少納言気づのひてい
とゝ苦しきことと
びあるこ。○うちとけ
てあやしきふるべどと
もの。ふるどたちなど
のあやしゝ打とけて
ふしてあること。

怪光
こよゐ〳〵ますとといへだ。夕顔　夕顔上
おりてなん。などおいとおふうちちいでさせる
へる。と物のたまりと思ひていふ。源有
べのなるを。そのさまこそものの一とゆ色させなんとて
なん。とのへバ。少納言　源有
だるこきいらくゆ色させむとてちちら
ひてゐる。夕顔入るへバ。いとこいらいゝ。うち
とけてあや志きふるべどもの侍るよとゆ色さす。
源有　夕顔八月十五夜
まべおどろい給へ。いでゐめさ海ゝゆ色んかい
いあさぎりをべ志でいぬるものとていりた

○かゝるあくさぎり」上よ今宵のさまをいふ馬ゐる○やとゝもやと思ひ」やハ思ひ出て聞てたつる声ゝ内のゝ人ゞ驚ろけどいとめあへぬゝ○ぢぐーかきつくろひ」源氏の内ぐーを撫るでつくろひ○あらざりけりとあきれて」姫君をとめて父宮まハあらじと知りなひてあきれるゝ○あなかうまろも知れど」源ア、ハウヤ命九父宮目録の人をとゝ○大補少納言ニ人とも姫君の方の女房のゝ○かうく云」ハうく云くも姫の父宮の方へ

まへバ。やとも云えきこえぞ。姫君ハなよんかちくねめへるを。源ぐいぐきおどろかす。姫君よおどろきて。父宮のハ思むのへるおふーたる。とねをびれておぼーたり。源ぐーうきつくろひなどーのて。いざーまへ。サアキ玉へゝ。父宮のハつのひまてまゐりきるぞ。とのゝよ。あらざりけるとあきれて。姫君とあきれて。おそろーと思ひたれバ。源氏あるんうまろもおれど人ぞ。とそこのきいてきていぞのへバ。大補少納言さらふせうなどんなどこいのよとゆは。何ゴトゾトゝ源氏ハ此ハ思ふよたゞく寄らぬぐ寄らぬぐ。前ゝも二条院へ寄ぎんとのの中ゝをこえーを。ハうくうとうりのふ

源氏物語講義　五十

ぶりのふべけれど○人ひとりまゐ〻せよす」姫君を二条院へ同伴せんよ内供ゝ借ゝ往なりと云れとゝ○おのづのらほどへてさるべきゝよおゝーまきぞ云ゝ」自然ゝ汚ゝまで御覧たゝえバハあとゝ兵アヘの方へ落りのふとゝもやもものくもはひゝハ源の物ゝ取のハんをゝゝ○さらぬんくゝゝ」今ハ姫のいとをきるけれバ。くゝくるーく思ゝ○よーのちまゝんハ云ゝ」源少納言の泪をゆもいれのゝぐ姫の供ゝハ落のゝな

べのゝなれバ。すーてきこえ。ぞうるべけれど。人ひとりまゐられよのーとのゝ人ハ。少納言心セハシクテゝんあるゝたゞーくてゝ。少泪フツガフニくゝハいとびんなくゝなん侍るべき。兵アヘのゝらせ孫ゝんゝハ。いのゝさまゝのゝ世やらん。おのづのゝ泪どへてきるべきゝよおゝーまきぞ。とゝもかゝゝゝ侍りゝんを。いとおりひやりなき泪どのゝゝよ侍れバ。源氏ふゝゝゝゝ人ゞくるゝゝ侍べーゝ。ゆれバ。源氏のちまゝんハ人ハまゐりなんのゝとそ。姫君よせさを孫へバ。少ゝアキレテあさまゝーういのさまゝあゝのゝと思ひあへくゝ。姫君のゝ云ゝもあやゝとおぼ泣なんゝまゐふ。少納言ゝとめきこえんのゝなけまぞ。

りとも申されそ思
をまよのせのまつ〇
よべぬひ〜はぞ」上の
第四節より物ぬひいと
ちるもけそひ」とそ〜
首尾之、

八ノ第七節

まぐあのうちぬ程
「上よあのつきこの
こよのせん」まぐ夜
ふのうおる」ちどの
いと夜ふのろ」ちどあ
るそ尾まて思尾〇
いのよ〜侍るべきと
まのとそやまら〜ば」
少納て二条院へつき
ても、狩衣ばかりの〜思
られて、いのよせばよ
けんとて寄りおり
のもたる之〇あの西

いぬ。ひ〜はぞどもひきさげて。こんのつもよろ
きき衣きこのへてのりぬ。八小段の第六節之。源門うちたく
よ来せぬ。二条院ぬちのければ。すぐあのうちぬ程よ
ふ来ぬり。西ノ對屋之
物そ〜して。すのぐんよはくるぬよせて物りるふ。
をばいとこのるらのよ。ほの抱て之
なほいと夜のとこちーさぐるをいのよ〜侍るべきと
まのとそやまらへぞ。そはこころなりはぐつのち
ばそちたちハふ決オ之ゆんと思ぐゆるべしと
たてふ〜たてまつりはれば。のへりぬんとあらばおくり
せんの。とのるふよりるくて物りぬ。よ
アキレテ胸ガサワグ之
さるまーうせ
ぬも来げよるらばやあの物ぐ〜のたま

ぼ〜の孫ぬんとそ〜」
ほ父来ア之近ひとら
んとのひ〜のを、
今来のりを思ばいの
よあらんと思ふ之〇
きをこのよゆ〜けれ
ばぬんぐみり」ほ祝
そのを夜ぬれば少納
云いまは〜と思ひて、
泣くのをこらくて居
たる之〇来たてさせ
ば来ぐ〜ハ助字之以
といふほどのさ之〇
物そ〜すどこ〜」お
ま〜なぐふこ〜よ
元よりあてかるびち
すぐ引あろせばまよ
合ふきまえ〇閑とのの
みのめ〜まつのえ
して」源のほ料の夜の

いんと。いのよ物そてのよべきはありさ侍よあ。とて〜。
かくてもあのもーきんぐよおくれのくるおいこぐさと
思ふよ。源のとぐすらぬを。さまこのよゆ〜けれぬんぐ
みるり」こる。西の對之住のをぬぐんぬれば。ほ帳なるどもな
のりけを。怪光めて。ほ帳やうはびやうふるどあさ
あり来たてさせるよ。ほ本丁のこのさびらあき
物ろ〜。物そ〜なるどたぐひきつ〜ろふぞありまてあ
きば。東ぐんぐのぐんよはとのみものめ〜よはをのた
て。物ほ寝ありもこ
いのよをるとならん。とふるそれ〜ちゆへど。さまこの

物召よせのふえ○こ
ろたてくれえちきみ
ちび」ぼうしさもちごえ声
をえてれ法のえぬえ
○ゆまいさはおほと
のこころゆずきぞえ」
源氏アよのの中えかハ
ずえやさやうえ少納
そぶりとえハねのハ
ぬちづるぞとえ、

八ホノ第八節

あけゆくまえ」上よ
まずあのうるちぬと
ある首尾え翌朝のさ
まえ○おとぐのつく
りざま」二条院の殿
の結構え○いしたな
くえ」少納そかやう
のふよ交らんハ似
合ぬと思ひあれど、

よとおもてもえきぞ。少納そぶもとよ称
んとのの中ふ（其の声え）いとと（如えカハユラシ源有）いまハさはおほとの
どゆるまずきぞよ。とを（其え）へゆ巳のへぞ。いとと（其え）びし
（ニモアラデ）くてなきふ（少納云）めのとハうちもふされぞ。
ものもおぼえぬなきみる」（八小段の第七節え源
まず君のあけぬほど
よ。其上及び少納そを二条院へ伴ひそゆりの中物え。あけゆくまえにえとせ
ば。おとぐのつくりざま。きつ（出来）ひざま（様え）。（イハレヌバカリ立派ニテ）さらまもいえ
ば。庭のきるぞもあまず（庭前ノサマえ）のさねさらんやうよえ巳
て。かくやくこちきるよ。ふたぐおもひみれど。（フツガフニ）
えるえまハ女なぞもさふらハぎりえうときぞ

あのよ女房もをまゆバ
少しんあくはふえ○
うときまらうどのの
ぞ」たまくの客な
どをあへらるく方
え○初向ろけまハあ
ら」源の近へのあえ
なきぶ大のうのえ
ハあらじとえ○日
たのうおきのひて」上
よあけゆくずくよ」と
ある子尾え○四ふづけ
て」夕方よりてえ
ざとタのうまりて
めさんとえ○ちひさ
きこのぎり」ゆざと小
童をめ巳えて○四人
まゆりたり」本の第より
小き童女四人ゑしえ、

八小ノ第九節

客
らうとなどのまゆるををふーのかえまりけれ
だ。をとことどもぞこそ（簾外）のとよりてる。かくえ人（内の京のいひ分）むの
へのえり。ときくえ人ハあれまえん。おぼろげよハ
あらじとまさめくたて（手水）うゆ（粥）たのゆるどこる（西の對え）
えまゆる。日ハたのうおきのひて。（源有）
しのめる頃。（其の里の人をめしえ）きえぐゆづけてこそハむの
させ源をめとのひて。（其の第の幸女をめしえ）ハよりえべめ。えのの
きぞ。ちひさ紀のぎることさらまゆれとありけ
れバ。いとをのしげて。四人（よりて）まゆりたり」（八小段の第八節え。）
二条院の秋の景色まり。少納（其の上え）
え庭のさまをえ屏も状（纏）え。天そ院ぞまゆとハれ

せめて（添詞）おこして、（添詞）添はせよ。迫りて起こして。○引きぐしなる人、目途なき人、俗ウカトシタ人ハのこと。○をこの きる色、黒き衣、上の七小の才四節よりをこの きる色なるどおぼえ。又八小の才一節よりをこの きる色なるどをやりめり。とあるよ。黒き衣。○はこころよつくべき ぞ。」添はせを住らかけやさんとてさまざま機嫌を取るふ。○よび色の ぞ。」鈍色、こまやかの八濃きこ、嵐色のこき衣を著るふ。鈍色八喪服、添はせ八祖母の喪中なれバ、かやうよ服のことまで細のよいつ八例の文法。○ひんぐのどんよ。」添の本の第よ。ぐりめるを第よ。上ぞ第のつ。○ものれの。十月のもの色のさまく。○四位五位こきさまざまハかきまぜよ。」こきさまざまハかきまぜとい。殿の内よ出入る人ぐ四位八黒、五位八赤き衣服なよこきまざまとい。

八小ノ才十節

てるらひる色なるど。」添はせの第ひのつべき料よもと、たやもき袴どもをかきて、えせのふ、巻画合の巻の伏案。○おこ。おこ。おこ。

てふ。めるを。せめて。おこして。（添詞）からおろ。れおそせそ。きぐろなるひとをうちをありなんや。女八んやらの和なるなんよきなど。今よりを。ゆ亟。ふ。内の容体。ちハさ。るれてみ。よりも。いうきよらて。なりうう字ちのこらひつ。をこの。きる。あそび物。のどもとりよはこのそして。こせなり。ハころよはくべきさとくもをしのみ。やうく。はよ。おきの出てこるふ。よび色のこはやのなるぶ。ちなくたるどもをき袴ひて。なよごろなくうちるみ。打笑るどそのをいとうつくしきさられもう。カハユラシク。添もう

ちるまれてえるふ。ひんぐ。添のんぐのどんよりめるよ。庭立出て。よはの末ぐちぬのるどのぞきこまんバ。簾の間よりのぞきのこ。ものれの第。ざ。色よ。ぬ位五位。こきさまざまよひまるるいでいりはく。ぬらぬ位五位。こきさまざまよひまるるいでいりはく。はかやうのさまを初てえるつ。げよをこの。きふこのる。と。ぼを。ち。屏風どもなど。いとをこの。いいきるをえつ。ちるぐさめておそるもえるのる。見ひいりるきを。きえりよも。八小段の才九節。添をさるるきよもの。えよこのるふ。べき種くの。袴を取ぬせて。ぬを住こ付このせるふ。ぬ。ぬ。天。添。ハ二三日。内裏。ものあり。ぬそで。この人。ぬをなつけ。のこらひ。ゆ亟。ふ。やぶ。ソマ。てて。手。ほん。本。ものと。ぼを。よ。や。てるらひる色なるどさ。ぬ。ぐ。よかきつ。みせ。そ。まつりる

細よ刻らゐども むさしの野といへばのとてれぬ
よ やさしそは はふの
ゆゑ」とあるを引けり、
若雲のゆゆのりとと〇
引とと ちひさくて」氏
家のかきさまよ少ふ
くてと、ちひさくとふ
河眼目と上のちひさき
さらふして」三小の七節ちひさ
くひきなて」四小の三節例の
ちひさくて」六小の四節ちひさ
きこのぎり」八小の五節ちひさ
眼目して思ひ出したり
〇ねそらゐどの音」その
の根を寝るこのとよ
せたりさは根はうえぬの
表と思ふチヤ武蔵野の
雪をかこのぬるその中の
りをとと草は武蔵

ふいとごうをこうしげよこのきあつめ給へり。むさし野
といへばこのとてれぬ。とむらさきのこのよこのふじうへ
るをとつきのいとヨロシキとれるをとりて。とる給へり。をと
ちひさくて。
ねそらゐとあそれとそ思ふ」むさしの家とけ
わぶるその中のゆうりを。とあり。いでドリヤ思ふかんめへとあれば。
まぐようかぐぞ。とてこあげのへるぞ。なよごろな
くうりくげるれば。うちはゐ笑ろそよのらねど
せたりさは根はうえぬの表と思ふチヤ武蔵野の雪をかこのぬるその中の
とのとまへばうちそらとこのんあまふとつき。

聖の名知るれば世よ
よ世、若の名も世色なれば、若雲のゆゆのりの思
上といふをを含めたる〇ちひさくきの
音このろは俗いひぐ
さまもるゑ、武蔵野をと
いへばのとてれぬ、と
みをうけていひぐさ
よさるゐゆゑを知ら
ちいどのマアソコデ、ちのの
と知れぬのどのやう
なるで、ゆゆりであるダ
ラウとのこと〇ちひ
さきこをて」行末は旅
若よちるべくこそそ
〇とあゆぎみうぞ
こ」尼このをを、
ひのるさまこ〇や
どもつくりつけて」

とりのるさまの容体をさるげなるもらうとの
こはゆれば。添ふまんるがらうとの
書損そこちひたとちぢてこくこのをちひこ
のとで。
ちりぐきねをこらねぞシカトシレヌおぼつかれいるなる
くさのゆゆのちなるもんといとこのけれど。おひさき幼
こそこ。文字のふこちのるこよいのこと。添ふこあまぎみよぞ
るこをこる。いまめこのきこをなちちぐいとよう
こんこまひてん。とここまひこなどちぐとやど
もはくつこつけて。添と思ふこ
こちあこびつこ。こよ

雛の家をいとうつくしう作り連ねて、○こよなきものの和もひのうに、源氏を始めひて、若君のことを申ひ思ひ聞こえ給ふ。

八小ノ第十一節

なほ〳〵人よりは、世じ上の第五節より、人りもくちのうめて」とある首尾に、源もかく、少納言も口のうめてあれば、○こあるを、もう、父宮の御はを、尼君の方へ、姫君をうつしのうに、継母のゆゑよりのぐ、と思ひたるを、乳母の少納言、尼君の遺志を思ひて、

なきものおもひのまぎらつるり。八小段の第十節に、源二三日物うり、世の尼君の宿里のことを、人々はふさぎ、世の上をもよりの宿里のことを、源氏のもとをもよりて。なづきもきこえのひけるを、世やらんこのことをいとてぞうとびあへをけるを、いといとよろこばせじと、源氏のものひ少納言おもひことをされば、せちよりくちづくめやりたく。あぐゆくんもきこえ、少納言のおもひ聞こえたるとのくやを、さたるるよ。父宮のいつこのひなるうおぼして。姫君のことよりこそ、イカヾシイ

うりのうんことをいとうのしとおぼしたるを、俗ニ云ヘ越苦労などいふのめしたるんだせ

のあまり。ジンジャウニ。姫君をいらうよりさんを。ツガフ。えんなるどふいたで。んよまのせてみてたふらつるなめり。とな

くなるくこのうりのひぬ。中の間。きくいでくてまつらばつげよ。とのの給へもつづらふしく。侍所のほうもあづひきこえのうど。あ。行方のもうとうぬを。あをてあくらしうりたちのくちなどこひきくのれとおぼすを。姫君の継母を。きこのうも。

たくぎうみをうとくしと思ひやをこのひけるんもうせて。ものんよまのせほべうおのほうたるうのうぬるハ。ロ惜しうおぼしけり。八小段の第十一節に、兵ア侍の宮。侍所なども。姫君上ハいのく考えることのくちをしう思ひ。やうく人まるりあつまりぬ。

んを利せ過して、姫を来てかくれしるんと。○めしきいそたてまつらばこそ」姫上の在所を少したるうらば告知せすと女房たちよのひ置て侍りめるこそ。○侍所の内行るを」兵アのうるよよ侍あるを。○あくらしうのうこそ」さて惜きことすてあしと姫上の宮子を悪きこひるこそ。○きこのうと」兵アのかの方へ。○れくぎみを」姫上の実母へ。○」のんりまのせつぐを」母かの方へのまよ姫をやうこうひてう

つくづくはーけるよ
お遣ちくるぞ嬉念
なりとこそ、

八小ノ身十二節

やうく人まるり」はこの
里の人くそろくとはこ
の方へ参り集るこそ○
はあそびぞくきの」はこ
の法遊びの相手の童
こそ○いとめづらしのよい
まめうしきこ」はこはや
法の法るまを童見どもの
心よめではこそ○
めしとより人まらひ
ちく」はこハ元より父兵
アハの名をバ又別び
してあれバこそ○いを
ドうもびまつ」
甚睦ひ經こ小児ども
のかちまりつくとこそ

法あそびぞくきれいらふべちごども。いとめづらしうよ
いまめうしきはなりさまどもなれば。童児どもこと
てあそびあくり。法師をとこ共のおそ世ばなどー
て。小のさびしきこ夕ぞれるどづのりぞ。左尼共こあまこ共をこひ
ゆ巨のひてこ。うちたきなどーのこどもを父母にこと
思ひいでゆ巨のるべ。ことりの人まるひまこと巨
孫こでまるひのこれば。ふーこのちれ法の養育おや
しのぶ母こと
を。いくーどうもむびまりいゆ巨あまふ。ものの
よりおこれ法に向てれバまづいでむのひて。衰あれようちか
こらひ。法の懐まを上入りてこ
ところよいりおそ。いとくおうとく

○ものうおこそれ
ば法他より海り来り
ものへバこ○いとくこ
こづうーとこ上
法をすーし水恥ーき
人と見ぬこ○ざるこ
こ」愛ーしもこあそ
びのふこのこふこ○
さこーらいありこ」
見まで小出のまぐ何
心もるく法をあそび
うこきのやうー見ひ
のふを云こ見より物
の料簡づきて嫉妬
ちどこるやうこるら
ばここ○ひこのこちち
心こ」男の心も見ま
でここハ遣ふこあこん
ここ○人もうらみぐ
ちここ」女の方こそ

こづうーここ心見ひここらば。ざこのここいこーこう
らうこ死こらばざなりきう。さこのーらんありるよ
これこもびの嫉妬ちこきこぞこよりぬれば。ここぐんち
心ここーこぞふ姫ーちいでここや。こんあこれ人
もうらここぞちこ。おこひの外のこここ。おこづこう出
くる後。いこをこうきここてあそびなり。むここめ
ここどこふここのりこよりぬれば。こころやここく
うちふここふこひ。面ぞこなきさこあこおきこふこる
どこえここ心きこ。これハいこここあこのこ
こここる。こづきぐここなり。こおぼいここめり」

水恨ミ嫉みのちまで、夫婦の互ひの外のふしゝも出くるを、いとおもしろきものあそびぐさならんとゝ。○これハいとさきのいうたるきゝ見ハ実のむきめとゝいさ海苔たるゝ〜づきものぞと地よりいひゝ、

若紫の巻終

八小段の半十二節ゝ。紫上やうゝなつきのひていとらうたき様ゝ。是迄を八小段とゝ。さて〜此段半十一節ハ。兵ア仁のかゝゝまで。紫上のことをいとのるることとなるらんと思ひ。さ海ゝて文を弦び。半十二節ゝまりてハ。紫上やうゝゝまなつきめとゝるさまを叙したり。かゝ者なつきめとゝるさまを叙したるハ。上の半九節十節より移て。源の紫をさまゝ〜ゝまなつけ給ふさまを載せたるそ尾まで。故半九半十両節の文を弦べるなり。

特40
148

五一函
四
七二號架
七冊